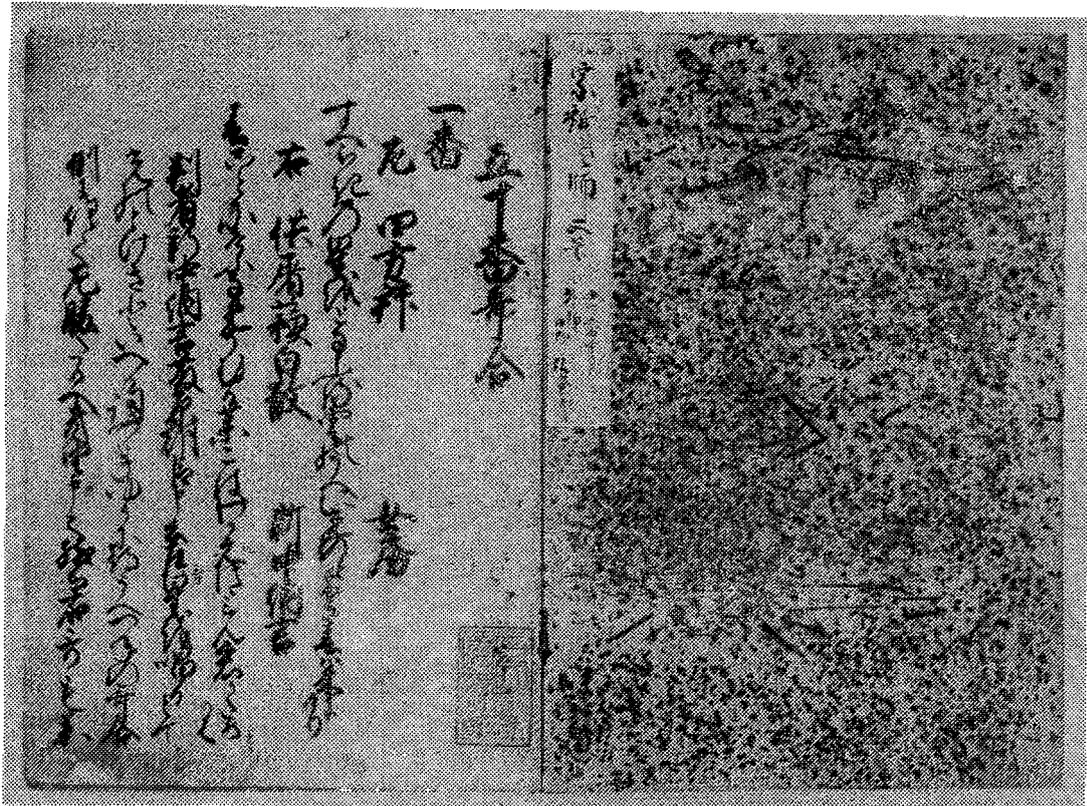


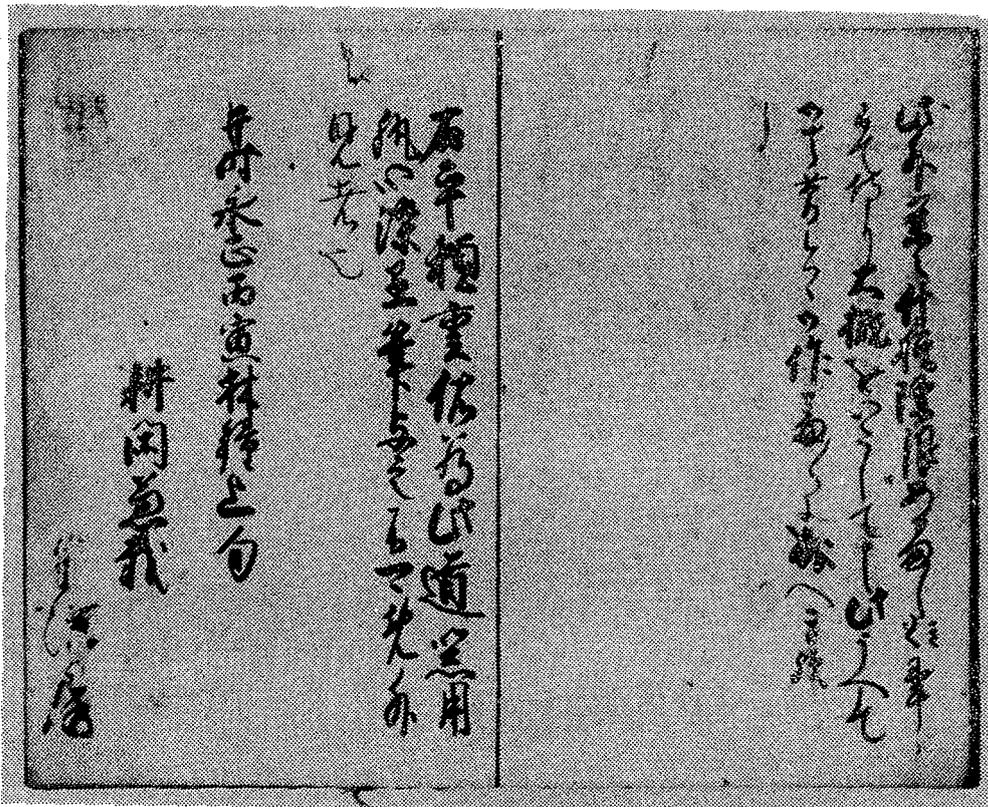
昭和五七年九月二日(木)～四日(土)・六日(月)～八日(水)開催

# 国文学研究資料館特別展示目録 七

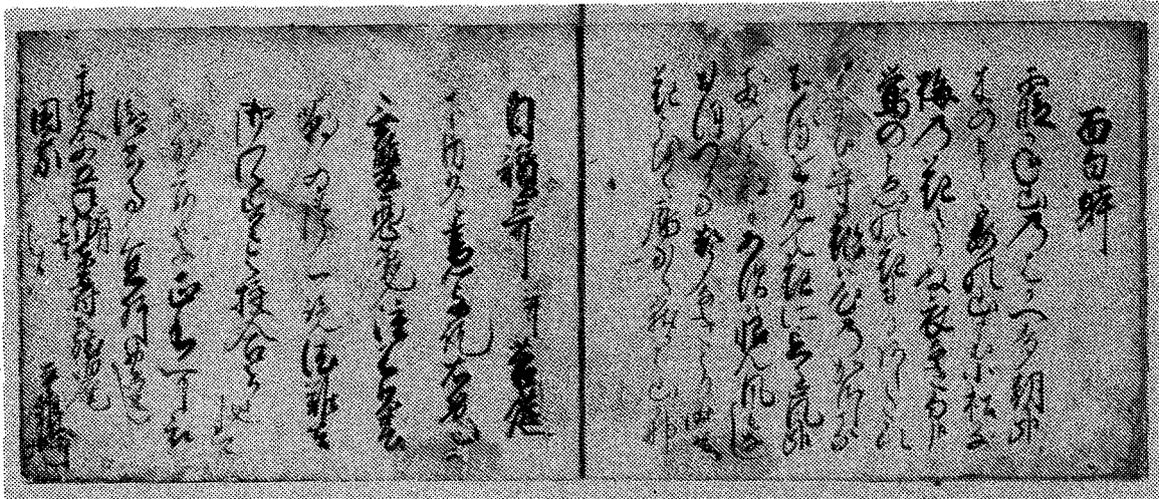
新収資料展



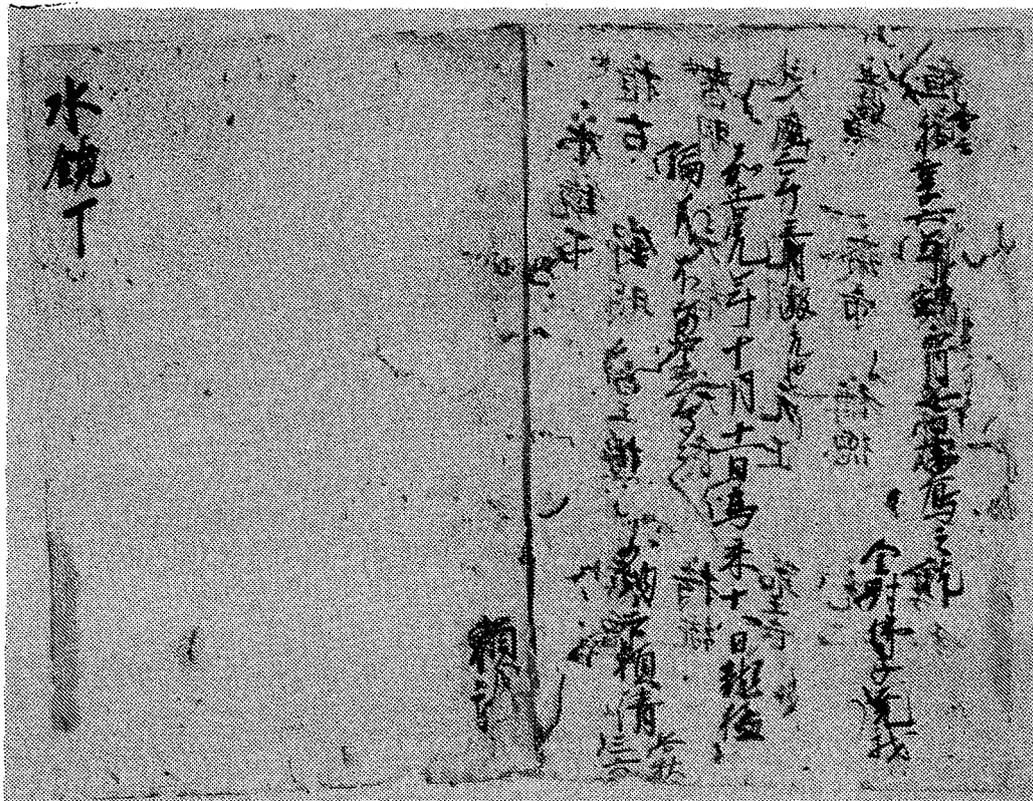
2. 年中行事歌合



5. 連歌延徳抄



6. 苔庭付自讃歌



9. 水鏡

## はし が き

国文学研究資料館は本年で創立十周年を迎えました。現在までに収集した資料は、マイクロ資料（国文学文献資料）五万点、学術雑誌・紀要二千五百種、国文学古典籍原本二万冊であり、さらに継続して収集しております。利用者登録数も八千人に達しました。

館の諸事業の中で古典籍原本の研究と普及を目的とする公開展示も回を重ねてまいりましたが、今回は新たに当館の貴重書に指定された原本、また特別コレクションの中から諸大名著作コレクションを展示しました。大学を中心とする多くの利用者の研究の進展に寄与するところがあれば幸いです。

昭和五十七年九月二日

国文学研究資料館

## 凡 例

一、この特別展示目録は、新収資料を中心としたものであり、内容は次の如くである。

新たに（特別展示目録六以降）貴重書に指定されたもの。昭和五六年年度の原本収集になるものうち特徴あると判断したもの（このうち、狂詩関係書は、一定の纏まりを持つため、一括した）。そして、このたび、特別コレクションとして一括された、福井久蔵氏の旧蔵になる諸大名著作コレクションがそれである。猶、末尾に諸大名著作コレクション一覧を添えたので大方の御利用を期待する。

一、目録の記載は次の順序によった。

書名、刊写年、大きさ（単位はcm—文中も同様）、巻冊数、請求番号（貴重書↓99、諸大名著作コレクション↓82、一般書ナ8等）。解説は、初めに作品の分類等。次に表紙・題簽、装訂、料紙、丁数・行数・字詰め、印記、奥書・識語・刊記の類、伝本等、作品内容、その他について記した。

一、解説は参考室が担当した。諸先学の研究等に負う所が多く、本来一々明記すべきであるが省略させて戴いた。

目次

17	孔子家語 (古活字版) .....	11	34	続太平楽府 (刊) .....	21
16	論語 (刊) .....	11	33	太平遺響 二編 (刊) .....	21
15	草双紙絵題簽貼込帖 .....	10	32	二大家風雅 (刊) .....	20
14	念仏草紙 (刊) .....	9	31	本丁文酢 (刊) .....	19
13	太平記音義 (古活字版) .....	9	30	太平遺響 (刊) .....	19
12	落窪物語 (木活字版) .....	8	29	吹寄蒙求 (刊) .....	18
11	払惑袖中策 (古活字版) .....	7	28	戲場篇 (刊) .....	18
10	寛永行幸記 (古活字覆刻整版) .....	7	27	諷題三咏 (刊) .....	17
9	水鏡 (写) .....	6	26	狂詩五七言画譜 (刊) .....	17
8	洛陽名所集 (刊) .....	5	25	勢多唐巴詩 (刊) .....	16
7	久世舞 (写) .....	5	24	茄子腐藁 (刊) .....	16
6	苔藓付自讃歌 (写) .....	4	23	娛息齋詩文集 (刊) .....	15
5	連歌延徳抄 (写) .....	3	22	前戯録 (刊) .....	14
4	賀茂翁家集 (木活字版) .....	3	21	太平楽府 (刊) .....	14
3	基佐自筆消息 (写) .....	2	20	寢惚先生文集 初編 (刊) .....	13
2	年中行事歌合 (写) .....	1	19	列仙伝 (古活字版) .....	12
1	詞花和歌集 (写) .....	1	18	続高僧伝 (写) .....	12

51	寛齋詩鈔……………	33
50	研覃居詩集……………	32
49	賢歌愚評……………	31
48	源女竟宴和歌……………	31
47	六義園八景和歌……………	30
46	平家語様聞書……………	29
45	菊の下水……………	28
44	謡曲口伝鈔……………	27
43	紫苑……………	27
42	思出草 続篇……………	26
41	思出草……………	25
	(諸大名著作コレクション)	
40	狂詩浚井鮒(刊)……………	24
39	馬鹿集(刊)……………	24
38	太平新詠(刊)……………	23
37	狂詩画図(刊)……………	22
36	太平二曲(刊)……………	22
35	新編太平楽府(刊)……………	22

諸大名著作コレクションについて……………	34
諸大名著作コレクション一覽……………	35

1 詞花和歌集（室町末期頃写）縦二四・五×横一七・二

サ28

白地に青色で横波型に梅を配す緞子表紙。題簽なし。列帖装。料紙は鳥の子。墨付は六八丁。遊紙前後各三丁。

一面十行、一首一行書き。奥書は「此集釋円雅新統古今  
隱名作者筆也於高倉閑窓加校合畢可為證本歟／享徳三年十二月廿一

日／和歌所舊生法印在判」と記す。また極札が付されており、それには、表「竹内正三位季治卿詞花和歌集  
春永ぬし」、裏「鳥

子四半本 全部丁  
亥神田定武」と記す。『国歌大観』所収本と比較するに、卷一の八番「子の日さす」の歌を欠き、

卷四の一五三番、一五四番歌の順序が入れ替わっており、卷五の一六九と一七〇に、「藤原仲實朝臣 くゝみてし

心ひとつをしるへにて野中の清水忘やはする」が入り込んでいる。この歌は本来二六二番歌の位置にあるもので、

同該位置にも存し、重複となっている。歌数は全部で四一首。また異文もあり、若干の「イ本」注記もみられ

る。詞花和歌集は基本的に初度本、二度本（精撰本）に分けられるようだが、まだ本文研究に余地があるよう

で本伝本にしても正確に位置づけ難いが、簡略にいえば被除歌が多いところから精撰本系に属し、八番歌「子の日さす」

を欠き、卷四、一五三番歌「おくやまに：」一五四番「ひぐらしに：」が逆であり、本文に異文があるといえる。

無作為にいくつかひろえば、82「さゝかにの」「かすらん」125「霜かるゝはしそとみすは」などがある。なお、竹

内季治は秀治の男。もと我家の諸大夫であったが將軍の執奏に依り堂上に加えられ竹内と称した。大膳大夫、正

三位。元龜二（一五七一）年九月十八日、近江にて没した。五四歳。

2 年中行事歌合（室町末期頃写）縦二四・三×横一六・七

9949

五十番歌合とも。鶯色地菊唐草模様を織る緞子表紙。中央上よりに「五十番歌合」と記す金紙の題簽を貼る。見

返し、銀の切箔散らし。列帖装。料紙は厚手の鳥の子。但、二丁だけ斐の入る薄手の紙（同筆）を用いる。墨付

四九丁。一面九行、一行約二二、二字。見返しに「宗祇法師正筆五十番歌合  
外題日野弘資卿」と記す極札を貼る。巻末に作者

名注記を入れるのみで、他に奥書の類はないが、同じく巻末に別筆細筆で「貞治五年十二月廿日当座」と記す。群書類従本に比し、勝負の表記をしない、作者名表記が簡略、少しく異文を持つ、イ本等の注記がなされている、といった特色がある。巻末の記載は「判者権中納言為秀卿加衆儀判詞／判詞女房二条関白良基公／作者／女房二条関白新中納言為秀内大臣二条殿御息／前大納言今小路二条殿伯父入道大納言松殿一二位中将四辻宮／忠頼朝臣鷹司大藏卿 頼阿 僧宗久殿中将二条殿御息 為邦朝臣／家尹朝臣月輪中將 貞世今川了俊 濫堅武藤入道／宗時朝臣 経賢僧都頼阿息 秀長朝臣／宗信法眼 嗣長朝臣典樂 守長／兼熙吉田神主 頼乗頼阿弟子」。書写は室町末頃と思われるが、題も少し簡略な部分があり、「一月一日」などは一切記さない、作者名も注記と思しき部分がない。本文は誤脱等を細字書入れにて補訂しているが、あるいは本来の簡素な形を伝える本かもしれない。諸伝本中에서도古いものの一つであろう。なお年中行事歌合（五十番歌合、公事五十番歌合とも）は、貞治五（一三六六）年に二条良基の主催したもので、良基、師良、良冬、頼阿など二三名の出詠になる。題は「四方拝」等の年中行事の三五番、「寄南殿桜恋」等の恋題、公事題の百題、五十番からなる。

### 3 基佐自筆消息（室町後期写）縦二五・五×横三八・八 一軸

ヨ1  
73

和歌を含む自筆消息。表装が施されており、消息の上下に鶯色地に牡丹唐草の金襴を張り、四周を同系色のもので囲い、一一七・〇×五〇・五の一幅に仕立てたもの。箱書きに「基佐自筆消息」「昭和卅九歳次甲寅五月念知彦（印）」と自筆を認めた昭和四九年五月二十日付の堀江知彦氏の筆が入る。消息は「尚々御伴申たる心ちこそ候へ／よしの山より御帰宅珍重／早々土産として名花一枝／短尺を付られおくりたひ候／御心根のほと殊勝難申盡候／返しに／しら雲の花にうつめる玉章を／むすひあけつゝみよし野の山／季春中旬／桜井／基佐拝」と記されている。猶この歌は基佐集（群書類従本）には未収である。また基佐は、通称を弥三郎（弥二郎とも）、永仙（遷）と号す。文明・

延徳・明応頃の人で摂津の出という。伝は明らかでないが、はじめ心敬に師事し、後に宗祇の門に入ったらしい。文明九（一四七七）年の宗祇等との百韻、文明一四年の宗祇・宗長との三吟などの連歌も知られる。ただ『新撰菟玖波集』に一句も入らなかったのは宗祇との確執によるらしい。晩年は山城の大原に住んだという。

#### 4 賀茂翁家集（木活字版）縦二六・一×横一八・一 五巻五冊

ナ2  
12

歌文集。鼠色系の地に鐺形様等の空押しの入る表紙。左肩に朽葉色の紙に「賀茂翁家集一（〜五）」と刷る題簽を貼る。第一冊、序三丁、凡例二丁、正誤二丁、本文三四丁。二冊、三三丁。三冊、五三丁。四冊、五四丁。五冊、四七丁。各冊一面十一行、一行二二字、題詞二字下げ。小型の木活字を用いるが、中により小型の活字によって二行割注を加えている部分もみられる。柱刻は下部に丁付のみ記す。印記は各冊巻頭に「高見」の円形朱印、「岡田眞之藏書」の朱長方印等がある。本刊本は、近世中期以降に刊行された木活字版であるが、後述の『落窪物語』の活字とは異なり、古活字版の活字の字形に近い。序末に「享和元年十月廿日 橘千蔭」とあり、次丁の凡例「賀茂翁哥集のおほよそ」末に「寛政三とせの霜月平春海記」とあり、次の正誤「おちたるを補ひ誤れるを正すをち〜」末には「合歛園のあるししるす」と記される。本作品は、巻一、二が和歌、巻三、四は雑文（序、跋文など）、巻五、紀行（旅のなぐさ、岡部日記）からなる賀茂真淵（元禄十一一六九七一年〜明和六一一七六九一年）の歌文集である。なお、『国書総目録』によれば、刊本として文化三年版、文化一四年版、嘉永三年版、喜永四年版、刊年不明の五種が掲出されている。

#### 5 連歌延徳抄（永正三年奥書写）縦二四・八×横一六・八連

99  
54

連歌式目書。黄茶色地に緑等で雲間の鶴を大柄に織り出した緞子表紙、見返し金銀切箔散らし。袋綴。料紙はやや薄手の斐紙。墨付二七丁。一面八行、一行一七、八字。巻末に「右平頼重依<sub>ニ</sub>為此道器用<sub>ノ</sub>執心<sub>ニ</sub>染<sub>ニ</sub>愚筆<sub>一</sub>与之不<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>」

可免<sup>ニ</sup>外<sup>ノ</sup>見<sup>ル</sup>者也<sup>ノ</sup>于時永正丙寅林鐘上浣<sup>ノ</sup>耕閑兼載<sup>ノ</sup>〇〇房<sup>ノ</sup>(上二字消し)と記す。丙寅は永正三(一五〇六)年で、耕閑は兼載の号。見返しに古筆の極札が付され「連歌宗匠兼載」と記してある。「月明荘」の印記あり。外題・内題の類は記されていないが、内容から兼載撰の「連歌延徳抄」と知れる。猶、延徳抄は、延徳二(一四九〇)年冬に猪苗代兼載が周防国山口の大内政弘の許に下向した折に、連歌の付合作法の種々相について、一々の例句をあげて解説教示したもの。伝本は極めて少なく、福井久蔵『連歌の史的研究』にも漏れている。諸本は初度本と再撰本の二種があり、本伝本は初度本で、恐らく兼載が政弘に贈った後、まもなく同家に近い平頼重の懇望に任せて書き与えたものの、天文頃の伝写であろう。初度本として知られる最古の本とみられる。

## 6 苔庭付自讃歌(天文五年写)縦一六・七×横二二・一

99 53

連歌・和歌。やや黒ずむ栗皮色の紙表紙。題簽なし。袋綴。料紙は鳥の子で裏打ちがなされている。墨付二五丁。うち前半の自讃歌が九丁、後半の「苔庭」が一六丁からなる。前半、後鳥羽院御製から始まる「自讃歌」の部分は、各一面に、作者名と十首を記す。後半は、内題「苔庭下付句」から始まる部分は、一面十二行、一行一句が記されている。巻末に「自讃哥并苔庭下内少々書写訖右筆無雙悪筆雖<sup>三</sup>不<sup>レ</sup>少<sup>三</sup>其嘲<sup>二</sup>為御一覽依難去御所望令校合者也連々被加落字正本可被清書事宜肝要者也」于時天文五年<sup>六</sup>七月<sup>七</sup>佐東安村於旅泊庵<sup>ノ</sup>円乗まいる<sup>ノ</sup>平雅胤(花押)と記される。「月明荘」の印記あり。「苔庭」は、内容、心敬作の付句百七十一句を、有心体・幽玄体・面白体の三体に分類し記載、終りにまた「面白体」と題して、発句九句を掲出したもの。付句は、有心―八三句、幽玄―三二句、面白―五六句と各体全て百八十句からなり、心敬句集としては他に例をみない大部なものである。自讃歌は、同じく雅胤の書写になり巻首に合綴したものとみられている。猶、本伝本は『心敬作品集』(角川書店)所収「心敬句集苔庭」の原本であり、同書解題をも参照されたいが、付句のうち、他の書にみえぬものが五四を数える。

7 久世舞（江戸後期写）縦二二・七×横一六・二 四冊

タ7  
8

久世舞の譜本。布目地紺表紙。中央に「久世舞」と墨書する白紙題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。各冊は、冊次不詳ながら下小口にヒ・ラ・ヲ・カと記すのに従って整理されているので、その順に一〇四とする。墨付は各冊、一―八二丁、二―七六丁、三―八一丁、四―八五丁からなり、それぞれ目次二丁を含む。同じく各冊は一面七行、一行は約一六字。柱の部分に朱で丁付けを入れるが、実体にみあっていない。また本文部に朱で直し・振仮名等を記す。印記は、目録の部分「久世舞」の文字の下に「平岡直行」の陰刻の朱方印がある。各冊はそれぞれ五十番よりなり、二百曲の曲舞・語りを集成したものである。鴻山文庫蔵「番外曲舞語り七十一番本」のみが持つ稀曲を含み、若干の新種使用語等を収める。第一冊は「上宮太子」から「末松山」までを収めるが、これは鴻山文庫蔵福王盛有章句本「久世舞」に重なる曲が多く、一部は同「番外曲舞語り七十一番本」所収曲に重なる。第二冊は「武王」から「濱荻」までで、貞享三年刊「当流外蘭曲」に抛り、一部は七十一番本所収曲をも合わせる。第四冊目は「五典」から「雪山」までで、七十一番本所収曲に番外曲等を合わせたもの。しかし、第三冊に関しては所依未詳であり、番外曲中より集成したらしいが、珍曲を含むので、以下にこの冊の曲目を記しておく。花紅葉・三之船・一本菊・將軍塚・草袴・濱土産・七十二候・西国廻・源氏目録・十体・大黒・黒谷詣・法花経・湖之八景・琴・茶教・明石・紫野・四季問答・啼不動・十種香・梅・布袋・紅葉・宇治橋姫・現在檜垣・錦織・九十賀・丁固・宮城野・甲斐塚・一言主・恋松原・靄岡・靄龜之中・百紅葉・鶯・花丸・鶯之前・御室・鯉魚・白狐・薄・梅乙女・若草・玉江橋・野馬台・小倉山・藤浪・蛭子。

8 洛陽名所集（萬治元年刊）縦二七・一×横一八・一 十二卷十二冊

99  
55

地誌。紺色無地の紙表紙。左肩に後補書き題簽「都物かたり一（〜十二）」（表記は異なる）を付す。各冊の丁



欽明」、中「敏達」考謙」、下「廢帝」仁明」の三卷に分けられるが、此の本は「推古」から「仁明」までを明らかに「水鏡下」としてあり、二巻本であったと考えられる。柳原紀光の『砂巖』六（『本朝書籍目録考証』所収）に「水鏡物語上下二帖」と見えるのに合う形である。本文は『新訂増補国史大系』が収載する二種（尊経閣本、専修寺本を底本とする流布本）のうちでは後者に近いものといえる。

10 寛永行幸記（古活字覆刻整版） 天地二九・二×全長（本文参照） 三卷

ヨ2 23

繪卷。藍漬染紙の原裝になる表紙。「御行幸之次第上（中、下）」と子持匡郭内に記す原題簽を付す。上卷二九紙、一二米五一糎。中卷一八紙、七米九六糎。下卷二一紙、九米二〇糎。料紙は雲母引厚手楮紙（但、下卷九紙のみ薄手で雲母なし）。上下兩卷の行幸図に手彩色（黄、朱、赤、緑、鶯、紺青、茶、薄茶、肉、紫、胡粉、灰、鼠の十三色）がある。寛永行幸記は後水尾帝の寛永三（一六二六）年九月六日、二条城行幸の次第を画いた行列部分（上、下卷）、行幸次第、催し、歌会等の事を誌した中卷から成る。古活字版には第一種、第二種（イ）（ロ）の計三種が存する。他に真字古活字本が存するが、別種の作品とすべきである。館蔵のものは右の第二種本を覆刻した整版本とみられる。またこれは、古活字版に「繪活字」が用いられた例としてよく知られている作品である。

11 弘ふつわくしゆうちゆうさく惑袖中策（古活字版） 縦二六・〇×横一九・〇 二冊

99 50

天台宗、仏書。紺色地雷文繋ぎに雨竜の空押し紋様表紙。題簽なし。袋綴。料紙は楮紙。上冊一八丁、下冊二五丁。一面十行、二〇字。本文四周单边（二三・四×一五・四）無罫。版心幅広く白口花魚尾に「拂惑上（下）△丁付▽」の柱刻がある。各冊、卷頭一丁は目録。「寶玲文庫」の墨印、「島田蔵書」等の朱方印が一丁表に、卷末に「月明莊」の朱印記がある。刊記は、下卷末に「於江戸梓刊」とある。また上冊末尾に識語が墨書されており

「点本云／康正元年乙亥九月廿日於台笛本院西谷佛乘房南面文二（下部裁断）應實俊師法印權大僧都嚴命雖爲惡筆染

毫（下部裁断）／右筆／永禄二年<sup>己未</sup>七月廿七日書了 右筆定珍公／天正五年<sup>丁丑</sup>十月廿日写訖 右筆豪春」と記されている。猶本刊本は、かなり早い時期の改装になり、裏打ちを施す他、天地を相当裁ち切っている。また全巻にわたって朱引き墨筆書き入れが見られ、前述の識語により、永禄二（一五五九）年定珍書写本（弘惑袖中策の最古伝本で叡山文庫現蔵）の天正五年豪春転写本に依拠したものと知れる。さらに数ヶ所にわたる誤植訂正が見られる。（例えば上巻目録「第八下能脱上」の「能」字は、「聴」と誤植してその箇所を胡粉を塗って消し、上から能の字を捺して訂正しており、また下巻には同様に胡粉で消した上に活字でなく筆で訂正した例もあり）書誌学的に興味深い資料である。伝本に関しては前述の写本の他、かなりの版本（元和古活字、慶安五、寛文元、宝永七、等）が知られるが、江戸版の古活字（元和六・七年頃の刊行と推定）は他に大東急記念文庫、日光山天海蔵の各一部を数えるのみである。これは近世初頭の江戸における古活字出版事業を知る数少ない例（そのほとんどは天台宗関係で版式等は叡山版と同じ）を示すものでもあり、印行の書籍自体が遺存稀だからでもある。本書は伝教大師最澄の撰とされ、諸々の疑惑迷妄を払って天台一乗の教えを究明宣揚するもの。弘仁九（八一八）年以降の成立かとされる。

12 落窪物語（寛政六年木活字版）縦二五・九×横一七・六 四卷三冊

99 52

平安朝物語。茶格子縞の表紙で後補になる。題簽は欠け「落くほ物語二（三終）」（上冊は記載なし）と直書きする。上冊は巻之一、中冊は同二、下冊は巻三、四（四八丁七行目中途以下が、原作の第四巻目に当る）からなる。上冊七五丁、中冊七一丁、下冊九六丁からなり、一面十行、約二二字詰で和歌は一字下げで二行書き。四周に違い斜線模様の匡郭があり、匡郭内二〇・六×一二・九である。版心には「○落くほ物語一（〜三）（丁付）」と入る。内題・尾題などの書名はない。巻頭に「野崎蔵書」の朱方印記がある。刊記は下冊巻末に「くはん政六つの

とし神無月初三日」とのみ記される。猶、下冊の丁付で四九の次が五一と飛んでいるが落丁ではなく、本文は連続する。木活字版は、近世中期から幕末ぐらいにかけて、小部数のみ商売を目的としないことで許可され出版したものであるといわれる。仮名のはあまり多くないらしい。古活字版に比し、その字体は独特で、この作は、まろやかな雅趣のあるものである。刷りはかなりよいが、概して後にいくほど雑になるようである。また落窪物語は、平安朝にも読まれていたことが確実なのだが、そのわりには善本といわれる伝本がなく、室町あたりの絵巻も現存するが、多くは近世の国学者達によって写されたものである。そのためこの木活字版も本文上からも貴重なもの一つである。なお、『日本古典文学大系』所収本の底本として使用されている。

13 太平記音義（古活字版）縦二七・七×横二一・一 上下二冊

99 48

辞書。栗皮色表紙、原装と思われる。題簽はなく「太平記音義上（下）」と白色で直書き。袋綴。料紙は楮紙。上冊四三丁、下冊四二丁。四周単辺で、匡郭内二三・一×一七・〇、一面十二行。柱刻は「太平音義上（下）」（丁付）」を主に、上冊三〇六丁に「太平抄音義上（丁付）」、また下冊一五丁に「太平抄一（丁付）」とを混用する。内題は「太平記音義第一卷并序（〜第四十卷）」。尾題は下冊末に「太平記音義畢」。刊記なし。印記は巻頭に「河本氏藏書」の朱方印、「小汀氏藏書」の朱長方印、「寶玲文庫」の墨長方印、巻末に「をばま」「月明荘」の朱印が各々捺されている。表記は原則として上下の二段にわけられ「一蒙 モウ／一南巢 ナンサウ」の如く、太平記中に出でる漢字と、その読みを記したものである。誤植は胡粉を塗って消し、上に墨書する。なお、本伝本は『古活字版の研究』下巻に第九四八図（第一種本（回種））として紹介されているものである。第一種本は、慶長一五（一六一〇）年刊本と同種同活字を以て同時に印行されたものとされている。刷り、保存ともによい。

14 念仏草紙 縦二六・六×横一八・九 二冊

ナ<sup>4</sup> 144

仮名草紙。丹表紙で原裝と思われる。題簽なし。内題に「念佛草紙上(下)」とある。上冊二三丁、下冊二〇丁。一面十行、一行約二一字。柱に「念仏上(下) 丁付」が記される。また和歌は三字程さげて二行書きされる。本文には、句点、漢字に読み仮名が付されている。無刊記。この作は、『国書総目録』によれば、寛文頃版、貞享三版、享保一三版、天明九版、刊年不明版が知られているが、本書も寛文頃の版であろう。念仏草紙は石平道人、鈴木正三(天正七―一五七九―年と明暦元―一六五五―年)の作であり、「松平和泉守乗寿の母堂、松樹殿、石川氏の所望によって、反故の裏に書いたものである。美貌の尼僧と、同郷の念仏行者とが、長雨のつれづれに對談して、問ひつ答へつ、禅の見地に立つ、果し眼念仏を經にして、世法即仏法の理を、平明な文で述べ書きしたものである。中には面白い譬喩を織り込みつゝ、甚深の仏語を理解させようとするあたり、誰人をも歸入せしめずには惜かぬ力強さがある」(『鈴木正三道人全集』解説―鈴木鉄心編)とされる作である。猶、正三には「盲安杖」「驢鞍橋」「破吉利支丹」「麓草分」「因果物語」「二人比丘尼」等の著作もある。

#### 15 草双紙絵題簽貼込帖 縦三六・九×横二六・三

ラ1

草双紙の絵題簽を集めて貼込んだもの。金茶地の布表紙。中央に「木版画 式百枚」と記す金箔を散らす白地題簽を貼る。折本一帖。台紙の料紙は楮紙。全五十一面の各面に四枚ずつ(最終面のみ八枚)、合計二百八枚の題簽が収められている。その内訳は、黒本・青本のもものが六十一枚、黄表紙のもものが百二十七枚、合巻のもものが十七枚(但し、分類の困難なものがあるため、いずれも概数)、その他に浮世草子のももの三枚が含まれる。草双紙は原則として刊記を持たないために、絵題簽がその版元と刊年を知るに当って最も有力な手懸りとなるが、剝落・改装等によって絵題簽を失うものが少くない。その一方で、草双紙の絵題簽のみを収集するという作業も、その動機は不明ながら、好事家達の手によって行われていたようであり、本書に類似の資料としては、『青本絵外題集』(東洋文

庫岩崎文庫)・『青本外題張込集』(国会図書館)・『表題集』(東京都立中央図書館東京誌料)・『集足黄表紙外題』(東京都立中央図書館加賀文庫)・『草双紙の表紙』(早稲田大学図書館)などが存する。本書は、前掲の諸資料と共に、草双紙の原本から失われた絵題簽を補い、草双紙の書誌的研究を進めていく上に、重要な資料を提供するものである。なお、『草双紙絵題簽貼込帖』の書名は、当館が付した仮称である。

16 論語 縦二六・八×横一九・一 二冊

719

何晏集解本。麻葉繋ぎ空押し(上冊裏表紙のみ雷格子に牡丹唐草の空押し)をする丹表紙。左肩に朽ち葉色の無表記の後補題簽を貼る。上冊六十丁、下冊五八丁。四周双辺の七行野であり、匡郭内、二一・六×一六・二。柱には「論語 序(一〇十)(丁付)」が記される。一行一七字で、割注の二行は一行野中に入る。内題は「論語」、次いで「學而第一凡十六章 何晏集解」の如くに記す。刊記はないが、いわゆる慶長古活字版以下、特に無刊記慶長版と文字配列まで一致しており、無刊記慶長版等の覆せ彫りである。本文中に上冊を主に名詞付け、句点等を朱で示すものかなりある。印字は上冊巻頭、下冊巻末に「<sup>(不説)</sup>齋藏書」の朱小型印、末尾に「桂窗」(小津桂窓)の長円朱印を認める。また上冊末尾梓外に記される「寛永八年正月吉日 賀州金首座(花押)」の書き入れは持主の入手時の書き込みと思われ、本書が寛永八年以前の版であることを示している。刷り、保存とも良好である。

17 孔子家語(古活字版) 縦二七・八×横一九・八、王肅撰 一〇卷五冊

7317

黒地に鹿・紅葉等を図案的に刷った後補の紙表紙(ただし旧表紙の残片と思われるものがその内側に見える)、外題なし。四周双辺(二一・二×一六・〇)、一面九行有界、一行一八字。全三三五丁、無刊記。版心は黒口花魚尾に「家語(丁付)」(序篇目部分)、「家語卷一(〇十)(丁付)」。活字は全卷一種のようであり、印面整美、二卷一冊に合するは原態である。本文中に朱・藍で句点・校異を記し、また頭註形式で朱・藍・墨の書き入れあり。

比較に用いられた本は「毛」「葛本」「二本」の如くあり、処々に「太宰氏曰」などの注も見える。右のうち「毛」は毛晋汲古閣本、「太宰氏曰」は太宰春台の孔子家語増註をさすものである。無刊記ではあるが内閣文庫蔵の一本に元和八年の墨書あって、それ以前の印行と知れる。各冊巻頭に「桜山文庫」（鹿島則文）、「福山岡西氏蔵書記」の朱印記あり。

18 続高僧伝卷十六（平安末期写）天地二三・六×全長一三九一・〇 一卷

99 51

唐高僧伝とも唐伝ともいう。巻頭一〇・九センチ程の余白があり、「續高僧傳第十六」と記す黄土地の題簽を貼る。巻軸は新補の木製のもの。楮紙、三十一紙をつなぎ、薄墨で野線を入れる。野の天地二〇・二、行間隔一・八と二・〇、一行約十八字である。巻頭は「續高僧傳第十六／習禪初 正傳十八 附見十五」とあり、続いて目次は「梁鍾山定林寺釋僧副傳一」から「隋襄州曇空寺釋慧意傳十八法永 空闍梨 曉智」まで。奥に尾題「續高僧傳卷第十六」、下に「習禪初」、一行において「二交（校カ）了」とある。「長寛元十（二カ）月廿九日一校了」と朱書されており、また巻頭に無野の「石山寺一切経」の墨印が記されている。いわゆる「石山寺一切経」の一部と知れるが、田中塊堂『日本寫經綜鑿』の記述によると、保元頃に念西なる人によって蒐集、補写されたものがあるらしいが、長寛元（一一六三）年と保元頃（一一五四〜一一五八）は近く、あるいは本伝本もそれと関わりがあるかもしれない。猶、唐高僧伝は、三十卷（三一、四十卷とも）。道宣撰。唐の貞觀一九（六四五）年に成立。慧皎の高僧伝に対して續と命名されたもの、一般に前者を梁伝というに對し唐伝という。内容は十科分類（一、訳経 二、義解 三、習禪 四、明律 五、護法 六、感道 七、遺身 八、誦誦 九、興福 十、雜科）による。慶安四年刊本がある。

19 列仙伝（古活字版）縦二七・三×横一八・二 二卷一冊

72 9

漢籍、劉向撰。原裝とおぼしき栗皮色紙表紙左肩に「列仙伝完」とした素紙題簽を後補。「月百四十六全一」の

隅切り素紙蔵書票（「西莊文庫」の朱陽刻印を押す）。袋綴、料紙は楮紙で、目録、本文共四周双边（匡郭内一八・三×一二・六）、一面有界一〇行、一行二〇字。全三二丁。無刊記。版心は「列仙伝目録」「列仙伝」「列仙伝上」「列仙伝下」の四種あり、各々下方に丁数を刻す。比較的大きくとした余白に墨の頭注、本文中の校合書き入れば主として朱で共に同一人の手になるものであろう。処々に雌黄で訂正を施す。巻首に「小汀氏蔵書」「岡田真」、巻尾に「桂窓」「西莊文庫」（すべて朱）の印記あり。無刊記だが、版式・紙質よりして寛永初期の印行か。陽明文庫、前田尊経閣等、かなりの文庫・図書館に蔵される。印刷に用いられた梓は二種、丁付数字の位置もそれに対応して二様ある。その他版心部分には種々の印刷上の問題が集約的にあらわれていて興味深い資料である。

## 20 寢惚先生文集 初編（明和四年刊）縦一五・六×横一〇・九 二巻一冊

ナ8 127

狂詩。朽葉色表紙。左肩に四周双边の「寢惚先生文集 初編」との原題簽。袋が保存されており、それには「毛唐陳奮翰著（「不許輩酒入于山門」の印文。）／寢惚先生文集初編／立春大吉朝寢房梓」と記されている。序跋は四周单边の五行野、本文は同八行野、（匡郭内一一・一×八・二）、一行に一四字である。序は二つで三丁と四丁、目録二丁、本文十四丁（但し、附録を含む）。跋二丁よりなる。第一序は「寢惚先生初稿序」とあり、序末に「明和丁亥秋九月／風來山人題紙鸞堂」と記し、「天竺浪人」「字余曰水局」の二顆の印文、第二序は「寢惚初稿ノ序」下に「陽春白雪」の印文、末に「明和丁亥秋八月 濟南郭 木子服撰」と「木子服」「濟南郭」の二顆の印、「烏山 石黄澤書」と記し、「黄澤」「石山」の二顆の印、跋は末に「物茂らい題」「永永浪人」「一錢」の二印がある。内題は「寢惚先生文集初編」続けて巻数を記し、次に「毛唐 陳奮翰子角著／阿房 安本丹親玉輯／蒙麓 藤偏木安傑校」と狂号を記す。また「附録」に「病目錢神論／奥北海天民著」二丁を付す。刊記は「曾釜田部惣太著／明和四年秋九月大叶／東都書肆切拔屋小文次／皇都書林嘉隆屋才七／浪花書房初編屋文十郎」とある。太田南畝（寢惚先生）

の狂詩文集である。『近世文学未刊本叢書』に複製と解題がある。

21 太平楽府（明和六年序）縦一七・二×横一一・七 三巻一冊

ナ8  
112

狂詩。縹色表紙。題簽欠。序は二つ四周单边六行野で末に「明和己丑八月／北山業寂僧都序」と「一字削叵」「堀芋山房」の二種の印文を有するものと、同五行野で末に「應昭子序ス」と「應昭子印」「大壺氏」の印文を有するものがある。跋は五行で末に「明和己丑八月書於八幡山毛午房」桑津貧樂」とあり、「鬼外」「福内」の二顆の印文がある。平賀源内の跋文と推定される。本文は同七行野（匡郭内一三・三×八・二）。序四丁と三丁、本文十八丁、跋三丁、全二六丁。内題は「太平楽府卷之一（一）三」で、内題下署名は「胡逸滅方海著／惠兼安陀羅校」と戯号を記す。内容は「呈畏雷上人」から「述懐」まで五二首の狂詩を収める。中に「遙寄寝惚先生」「婢女行」などがある。刊記は「多和井茂内著／書林／只見屋調助／大井屋左平次」とある。胡逸滅方海・多和井茂内と戯称する著者は、銅脈先生こと畠中観齋である。観齋は、名驥、諱正盈、又正春、字子充、通称政五郎、後頼母、太平館主人、片屈道人とも狂号した。洛東聖護院の宮の家司で享和元年六月二日五十才で没。蒲生君平や、南畝、問屋酒船、腹唐秋人らとの交友もあり、「天明寛政の時代に、志を伸ばすことを得ずして、酒と狂詩に韜晦した人」（「銅脈先生」、『森銑三著作集第二巻』）。本書は著者の狂詩の処女集であり、明和六年は十八才の年である。彼の狂詩には「勢多唐巴詩」（明和八）「吹寄蒙求」（安永二）「太平遺響」（安永七）「同二篇」（寛政十二）「狂詩画譜」（天明六）があり、「二大家風雅」にも南畝と共に収められる。『近世文学未刊本叢書』に複製と解題がある。

22 前戯録（明和七年刊）縦一八・二×横一一・〇 一冊

ナ8  
122

狂文集。縹色表紙。左肩に黄色地に四周单边の原題簽「前戯録」。序跋は四周单边五行野で、本文は同（匡郭内一三・六×八・三）七行野、一行十四字。序跋各三丁、本文十八丁、全二四丁。序題「前戯録序」、末に「明和己丑之

秋／蘇門山人服天游」と「嘯」「服天游印」の印文。跋末に「明和庚寅之春三月／東臯永忠原」と「觀鷺」「永忠原印」の印文。刊記は「明和七庚寅歲三月／京師 寺町通姉小路北／佐々貴摠四郎」。内題「前戲録」、下に「河玄佑著」と記す。尾題「前戲録終」、柱は「前戲録」（序跋は「序」「跋」と記す）、下に丁付。裏見返に「寺町通御池下ル町錢屋摠四郎板」の蔵版目録「勢多唐巴詩」から「太平遺響二編」まで十二作品が入る。内容は雑話二三首（痴漢拝獄卒話／蜈蚣後期話）、序一首（送石部金吉生序）、記事一首（記坂田助逢妖事）、詞三首（小兒呼螢詞／月兮詞）、式一首（百談式）、伝一首（凶大方伝）で、小咄を漢文体にした雑話二三話の他、童謡その他の戯文の類を収める。著者河村玄佑の伝は未詳。服部蘇門、永田東臯などと親交のあった漢学者か。武藤禎夫編『漢文体笑話ほん六種』（近世風俗会）に複製と解題がある。

23 娛息齋詩文集（明和七年刊）縦一五・七×横一一・一 一冊

狂詩文集。縹色表紙。左肩に子持梓原題簽「娛息齋詩文集全」。見返に「闇雲先生作狂詩廿四首／娛息齋詩文集／江

戸書肆 當筒房梓」とある。序跋は四周单边で五行野、独言、総目、本文は同七行野（匡郭内一一・七×八・一）、

一行一四字。序跋各三丁、独言二丁、目錄二丁、本文一九丁、全二九丁。序題「娛息齋詩文集叙」序末に「明和七年

庚寅春三月／向水能轉戲慎識」と記し、「向水」「能轉戲印」の印文。「独言」末には「津田井佐衛内」の署

名。跋は「自跋」で末に「娛息齋延命題」と「言云」「延命」の二顆の印文。目錄題「娛息齋詩文集目錄」、内題

「娛息齋詩集」「娛息齋文集」、内題下署名「向水能轉戲編集」。尾題「娛息齋詩（文）集終」。柱刻「娛息齋 独

言（総目、詩集、文集）」下部に丁付（序跋に書名なし）。刊記「明和庚寅歲夏五月 書肆 徳若屋才藏 田分彦左

衛門 四々野十六兵衛」と戲書する。狂詩二四首と狂文八章を収める。著者闇雲先生は「独言」中に「闇雲先生者

生常盤國住神田八町堀」とある。御息災延命のもじりは宝曆二年の当世下手談義にも見える。

24 茄子腐藁（明和七年序）縦一七・一×横一一・八

狂詩。縹色表紙。左肩に子持梓原題簽「茄子腐藁」。序跋は四周单边無罫、本文は同七行罫（匡郭内一三・一×八・一）、一行十四字。序跋各三丁、本文十三丁、全十九丁。序題「茄子腐藁自序」、序末に「明和庚寅年仲夏 江蘭漪撰」と記す。跋題「茄子腐藁」、跋末に「椒場逸人題」及び「椒場」「逸人」の二顆の印文。刊記なし。内題「茄子腐藁」、内題下に「可々子著」とある。柱に書名なく「序」と「跋」の字のみあり、下部には丁付あり。尾題「茄子腐藁終」。内容は、河東曲、贈書生、など二十七編の狂詩を収めるが、銅脈先生の「太平楽府」（明和六年）の忠実な模倣作で、詩題もほとんど同一である。著者の可々子は「竹苞楼大秘録」に浦野延策であるという。なお本書は刊記を削った後印本で、初版は「明和七年庚寅仲秋撰坂高麗橋一丁目藤屋弥兵衛 平安寺町通姉小路北 錢屋惣四郎」の刊記を持ち、見返題に「加兵衛先生著／茄子腐藁／太平楽府次韵悦歌／星文堂 竹苞楼梓」とあるものである。近世風俗研究会刊『末翻刻狂詩九種』に影印と解題がある。

25 勢多唐巴詩（明和八年序）縦一七・八×横一一・〇 三卷一冊

狂詩。縹色表紙。左肩に四周单边「勢多唐巴詩」の原題簽。見返に唐風の絵が入る。序は二つ、四周单边五行罫と六行罫のもの、跋は同無罫四行、本文同八行罫（匡郭内一三・二×八・二）一行一五字。序二丁と五丁、跋二丁、本文一二丁、全二二丁。第一序「勢多唐巴詩序（下に「本来無東西」の印文）」の末には「明和八辛卯七月／梅村 和中散人」と「本家」「堤」の二顆の印文。第二の「勢多唐巴詩序」末には「唐金 義嶋子題」と記し、「市郷」「龍宮城外」の印文。跋末には「其木田神主／杉館太夫／卯九月吉日 安全（絵）」。柱刻は序二丁のみ「唐巴詩」とあり、他は巻数と丁付のみ。尾題「勢多唐巴詩卷之一（〜三）終」。内題「勢多唐巴詩卷之一（〜三）」、内題下署名は「胡逸 滅方海著／惠萊 安陀羅校」と戯署する。裏見返に「寺町通御池下ル町錢屋惣四郎板」の蔵版

目録「勢多唐巴詩」から「太平遺響二編」まで一二作の目録が入る。内容はこの年流行の伊勢御蔭参りを諷した二五首の狂詩を収める。著者、胡逸滅方海は、序中にも云うごとく銅脈先生、即ち畠中観齋である。

26 狂詩五七言画譜（後印本）縦一八・〇×横一一・九 一冊

ナ8 131

狂詩画本。砥の粉色表紙。左肩に子持梓原題簽「銅脈先生狂詩画譜」。序・本文とも四周单边無野（匡郭内一三・五×八・六）。序二丁、目録一丁、本文二四丁、全二七丁。序題は「狂詩畫譜序」、序末に「錢屋總四郎撰」とあり、「本屋」「親玉之印」の印文あり。目録題「狂詩五七言画譜目録」、目録には「黄石公 三十三間堂 阿染浴場 尋隠者不遇 橋辯慶 極楽山水 大夫 按山子 西瓜目引 水亭 娼 鼈 過茶屋 秋山 藝子 辻堂 二軒茶屋 怪鳥 辻占 猿舞 貧乏神 寒山拾得 乞食 四条納涼」の二四詩題を記し、末に「新春慶賀書」と記し、「年玉」「進上」の二印あり。丁の表に絵、裏に狂詩を入れる。詩は全て銅脈先生のもので、絵には、池己陳、梅花、雲衝、柴鹿道人、那智鷹、夷國上人、等の署名がある。京の書肆錢屋総四郎が銅脈先生の詩を集めて、絵を付して刊行したものである。刊記なし、後印本。『国書総目録』には明和八年版・天明六年版を載せる。

27 諷題三咏（明和八年刊）縦一七・七×横一一・一 三卷一冊

ナ8 123

狂詩。縹色表紙。左肩に子持梓原題簽「諷題三咏」。序跋は四周单边六行野、本文は同七行野（匡郭内一三・一×八・三）一行一四字。序二丁、跋一丁、本文二二丁、全二五丁。序題「諷題三咏叙」、序末に「明和辛卯秋七月／同音堂主人題」と「四拍子」「御骨折」の印文。跋末に「明和辛卯秋／狂言子誌」と「太郎冠者」「近邊人」の印文。柱刻は巻数と丁付のみ。内題「諷題三咏卷之上（く下）」、内題下署名「鏡間 私牽幕撰」。尾題「諷題三咏卷之上（く下）終」。序末に「詩人姓氏」として「物懸字萬端號石臼先生／甘徒字甚六號拔作道人／白毛字都臭號青僕逸史」とあり、上巻物懸、中巻甘徒、下巻白毛が五古・五律・五小・五排・五絶・七古・七律・七小・七排・七

絶の各十首を詠む体の構成である。老松から猩猩々まで謡曲の題によって狂詩三十首を作成したものである。

28 戯場篇(明和九年刊)縦一八・二×横一二・二 三卷一冊

ナ8 130

狂詩。縹色後補表紙。左肩に子持粹原題簽「戯場篇」。見返に「青田先生著／戯場篇<sup>全部</sup>／書肆廣文堂藏」。序跋  
目録本文とも四周単辺の七行野(匡郭内一三・〇×八・二)、本文一行一四字。序二つ三丁と二丁、目録一丁、本  
文一〇丁、跋三丁(裏打ちの際の綴違えあり)。「戯場篇序」の末は「明和九年夏六月／櫓下 油無氏題」と「三  
石」「無人」の印文。「自序」末に「青田立見撰」と「常席凡太」「立見」二顆の印文。「跋」末に「非我左衛門  
題」と「非左衛門印」「横平」の二顆の印文。目録題「戯場篇目録」、内題「戯場篇卷之一(一)終(三のみ大尾)」。柱刻「戯場篇(卷  
「青田立見撰／桑津貧樂校」。尾題「戯場篇目録終」「戯場篇卷之一(一)終(三のみ大尾)」。柱刻「戯場篇(卷  
数不記、序、自序、目録、跋の字あり。下部に丁付)。刊記「壬辰明和九年九月／京師書肆 圓屋清兵衛」。内容  
は、木戸口、雪隠など芝居関係の事柄を二五篇の狂詩に述べたもの。吹寄蒙求に「青田借火」と題し、本書を引用  
する。

29 吹寄蒙求(安永二年刊)縦一七・九×横一一・六 上卷一冊

ナ8 113

狂文集。縹色表紙。左肩に子持粹原題簽「吹寄蒙求」。序は四周単辺五行野、本文は同七行野(匡郭内一二・九×  
八・二)、一行一四字(詩は一字下げの十三字)。序二つ各三丁、目録一丁、本文一六丁、全三三丁。第一序「吹寄  
蒙求序」の末は「安永二年夏四月／瘤道人題」と「盲不兎蛇」「三毛不足」の印文。第二序「薦吹寄蒙求序／片屈道  
人撰」の末は「安永二年癸巳四月一日」と「石部金吉」「金兜之印」の印文。柱刻「吹寄蒙求」下に巻数と丁付。  
目録題「吹寄蒙求標題」。内題「吹寄蒙求卷上」、尾題「吹寄蒙求卷之上終」。巻末の刊記の前に「吹寄蒙求中下近  
刻」とある。刊記「安永二年癸巳四月 平安書林 寺町姉小路北佐々木惣四郎」。裏見返に「寺町通御池下ル町銭

屋摠四郎板」の蔵版目録、「勢多唐巴詩」から「太平遺響二編」まで十二作をあげる。内容は蒙求を模した戯文で「於長西向 伴内東遊 奮翰好穴 可肅贈筐 彦八雲氣 善六露盤 青田借火 息齋閉門 鯉名口舌 於染腹帶 文七仕俠 雛次寛仁 業寂腸鳴 妙貞膽行 掃溜為糞 噲会如泥 鯉長構而 雷子本哉 天所弥寒 禹鈍泥着 菅相吐梅 於福携樽 梅枝姦黠 常盤富落 辯慶食蛸 奸相憶魚」の二六話、特に、寝惚先生、劇場篇（明和九）の青田立見、娛息齋詩文集（明和七）の娛息齋、太平楽府に序した業寂法師（詩僧六如）、掃溜先生詩集（明和八）の掃溜先生、浪華獅子（明和七）の天所先生、片仮名世醉記（明和九）の無底先生、准東集（明和九）の禹鈍泥等の名が見えるのが注目される。『近世文学未刊本叢書』に複製と解題がある。

30 太平遺響（安永七年刊）縦一八・〇×横二二・〇 三卷一冊

ナ8 114

狂詩。縹色表紙。左肩に四周単辺の原題簽「銅脈先生太平遺響」。序跋四周単辺五行野、また第二序は同六行野、本文は同（匡郭内一二・九×八・二）七行野、一行一四字。序題は共に「太平遺響序」で、第一序末に「安永戊戌五月甲子泗桑吳麓書於賢賢軒」と「寛永通宝」「十八文」の二顆の印文。第二序末に「安永戊戌七月／門人／樗露軒劉隆智拜撰」と「蝦夷鳴人」「每良多」の二顆の印文。「跋」末に「河東名醫良朴題」と「倉橋氏」「一字木」の二顆の印文。内題は「太平遺響卷之一（〜三）」、内題下署名は「朝鮮 弘景子閱／麻阿 衛淮南校」。尾題「太平遺響卷之一（〜三）終」。柱刻「太平遺響卷一（〜三）」（下部に丁付、序跋に書名なし）。内容は三七首の狂詩を収めるが、中に魚焦と銅脈、釈業寂と銅脈の贈答各一对を収め、他は全て銅脈のもの。刊記「安永七年戊戌秋 平安 寺町姉小路北 佐佐木惣四郎」、裏見返に「寺町通御池下ル町錢屋摠四郎板」の蔵版目録、「勢多唐巴詩」から「太平遺響二編」までの狂詩集一二作をあげる。『近世文学未刊本叢書』に複製と解題がある。

31 本丁文醉（天明五年序同六年跋）縦一六・二×横一一・五 六卷一冊

ナ8 120

狂詩。縹色表紙。題簽剝落。見返に「寢惚先生閱／腹唐穉人著／本丁文醉／書肆天作堂」と「現金無掛直」の印文。序は四周単辺の五行野、本文は同（匡郭内一・八×九・〇）七行野、一行一四字。序二丁、本文一八丁、跋は二つで二丁と三丁、全二五丁。序題「本町文醉序」、序末に「天明乙巳秋七月／四方山人題」と記し、「四方山人」「狂文本家」の二顆の印文。第一跋は「本町文醉跋」で末に「天明丙午春正月元日／伯樂 宿屋飯盛題書」と記し「飯盛之印」「字曰杓子」の印文あり。第二跋の末には「平安太平館主人識」と記し、「太平館」「樂」の印文。柱刻「本丁文醉」（序跋の字と丁付あり）。内題「本丁文醉卷之一（一六）」、卷一のみ次に「二街 腹唐穉人 編選 魚岸 邊越方人同校」と著者名を記す。五四首の狂詩を収め、太田南畝の序、石川雅望と銅脈先生の跋文を有する堂々たる狂詩集である。『近世文芸未刊本叢書』に複製と解題あり。著者の腹唐秋人は中井董堂（宝暦八一七五八―年）文政四―一八二一年）の狂号。董堂は書家、詩人、狂歌師、江戸の人。名は敬義、字は伯直、董堂・小笠・漁澄老人などと号し、通称は嘉右衛門。（『近世文芸家資料総覧』）。

32 二大家風雅（寛政二年刊）縦一八・〇×横一二・四

狂詩。縹色表紙。左肩に子持梓原題簽「二大家風雅」。袋が保存されており、「銅脈先生／二大家風雅／書肆竹筥樓梓」と記し「千里走様虎子欲哉」の印文あり。序二つ、四周単辺五行野と六行野、本文同七行野（匡郭内一三・一×八・二）、一行一四字。序各二丁、本文一八丁、全二二丁。第一「序」末には「江都 問屋酒船撰」とあり「春蟻」「江戸市人」の印文。第二序末には「寛政庚戌秋八月／平安松梅亭主人（識）の字がかすかに残る」と「太平館用所之印」「親玉」の印文。柱刻「二大家風雅」（序は「序」「発端」）下部に丁付あり。内題「二大家風雅」、内題下署名「西 銅脈先生／東 寐惚先生／著」とある。尾題「二大家風雅終」。刊記「寛政二年庚戌孟秋吉旦 錢屋惣四郎版」。内容は銅脈寢惚両先生の贈答の詩篇を諸書より抜き出して収録し、更に江戸の諸先生の御作と銅

脈の近作を収めたもので、問屋酒船、腹唐秋人、不圖山人、馴角散人、等の作者名が見える。

33 太平遺響 二編（寛政一一年序）縦一七・二×横一一・七 三卷一冊

ナ8 III

狂詩。縹色表紙。左肩に四周单边原題簽「銅脈先生太平遺響」。序は四周单边六行野、本文は同七行野、（匡郭内一三・〇×八・二）、一行一四字。序二丁、本文二二丁、全二四丁。序題は「太平遺響二編序」序末に「寛政己未之春我楽多菴主人／書于三條旅籠屋」と記す。内題は「太平遺響二編卷一（〜三）」。内題下に「銅脈先生著」と記す。柱刻「太平遺響二編」（巻数と丁付を下に記す）。尾題「太平遺響二編卷一（〜三）終」。内容は銅脈先生の狂詩九三首を収める。中に「悼銅脈先生」と、これに答えた「答人用韻」は、銅脈の死の誤報を受けた某氏が悼詩を叙したのに、当人が答えた作と云われる。

34 続太平樂府（文政三年序）縦一七・二×横一一・九 三卷一冊

ナ8 124

狂詩。縹色表紙。左肩に四周单边原題簽「續太平樂府」。序二つ四周单边六行野と七行野、跋同六行野、本文同七行野（匡郭内一三・二×八・二）、一行一四字。序五丁と二丁、跋二丁、本文二二丁、全三二丁。序題ともに「續太平樂府序」、第一序末「文政庚辰五月賣卜逸夢徹方書於行燈闇處之軒下」と「夢徹方印」「易」の印文、第二序末は「文政三庚辰五月上澣／當黃帝之肩門人／與前武朱眉拜」と「安才」「百吉六文不足」の印文。跋末には「化者部間牟氏響入道跋」に「響入道印」「山水天狗」の二顆の印文。柱刻「續太平樂府（巻数なく、序跋の字あり）」下部に丁付。内題「續太平樂府卷之一（〜三）」、内題下署名「道茂 伊賢閱／南娥 王維校／馬賈 駒濟梓」と戲著する。尾題「續太平樂府卷之一（〜三）終」。刊記「猪飼五九郎著／書林／下田尾善内／尾計屋万八／千穂萬歳樂叶（以下長方枠内に）京都書房／錢屋惣四郎／堺屋伊兵衛」と記し、匡郭外に「（破損）新曲 太平二曲 各出来」と記す。内容は愚仏先生の狂詩五六首を収める。銅脈先生の太平樂府に倣ったもの。

35 新編太平樂府（後印本）縦一七・〇×横一一・四

ナ8 117 22

狂詩。出方第滅多の『片低先生詩集』の改題本。縹色表紙。左肩に子持粹原題簽「新編太平樂府」。序四周单边五行野、本文同七行野（匡郭内一三・〇×八・三）、一行一四字。序三丁、本文一三丁、全一六丁。序題は単に「序」（もと、片低詩集序）、序末の刊年「明和辛卯十一月」を削るが、「素寒貧題ニ於選非堂」と「寒貧」「水茄」の二題の印文はもとのまま。内題と署名は全く変えて「新編太平樂府」、内題下署名を「胡逸 滅方海著／惠萊 安陀羅校」とする。卷末十三丁表の刊記「今見屋甚次／時雨屋庄五／陽屋大六／同刊」はもとのままだが尾題は削除してある。一三丁裏「矢毛野勘八著」とあるのはもとのままだが、次の「明和八辛卯年冬十二月／書肆小林庄兵衛」は削っている。柱刻は丁付のみで、これはもとのまま。改題に際し銅脈先生作の如く粧うが、原版の内題下署名は「虚口 山方第滅多著／門人 雲津九極樂校」である。

36 太平二曲（文政三年序）縦一八・四×横一一・〇 三卷一冊

ナ8 126

狂詩。縹色表紙。左肩に四周单边原題簽「太平二曲」。序は四周单边六行野、跋は同四行野、本文同七行野（匡郭内一三・五×八・二）、一行一四字。序四丁、跋二丁、本文二六丁、全三二丁。見返に「安穴先生著／太平二曲／匹澤樓開雕」。序「太平二曲序／安穴道人自撰」、末に「文政庚辰五月上浣」。跋末には「武朝保跋」と記し「カツテミナ」「妙典司」の二題の印文。刊記、匡郭外に「京都書房 堺屋伊兵衛板」。柱刻「太平二曲」（下に序、跋、丁付あり）。内題「太平二曲卷一（〜三）」、内題下署名「連州／武朝保閱／鄒可潭校／王震起梓」。尾題「太平二曲卷一（〜三）」。詩の作者に、武朝保、茶羅山人、烏山人、鄒可潭、間拔山人、雲徹、愚佛山人、などの名が見える。

全五三首。著者安穴先生は中島棕隠。

37 狂詩画図（明治の後印本）縦一五・七×横一一・一

ナ8 115

狂詩画本。薄茶色表紙。左肩に四周単辺の薄青色題簽「狂詩画圖全」。序は四周単辺五行野、跋・目錄は同六行野、本文無野（匡郭内一三・一×八・三）。序二丁、目錄一丁、本文及び跋二七丁、全三〇丁。見返に「烏山人先生著／狂詩畫圖／茶樂齋藏版」と記す。袋が保存されており、見返と同一の記述を持つ。序題「狂詩畫圖序」、序中に「烏山久齋」の戲著名が見える。序末に「愚佛山人撰」と記し、「鈍狗齋」「殺生」の印文あり。内題なし。柱刻は下部に丁付のみ。目錄には「春日雜詩、井上虎之進、贈老人困妾、舞会、猫、三十石夜舟、糺小舟、雜詩、相撲、暮会、丁稚生洲、贈酒酪酌寺、薄茶店、煮売店口号、芸子立、北条虫、初雷、放蕩行、貧乏人、拳、借馬、述懷、大男」の二三の詩題をのせる。跋末に「門人韓間丘連主印」とあり、跋中に「烏山人先生者真大通也嘗自号土仙人」と記す。内容は、見開きで右に狂詩、左に絵を対比させるが、見開きの狂詩の次に見開き絵を付すものが二例ある。絵は「華山」とある。裏見返に「明治因縁」を始めとする六点の広告あり、末に「京都書林寺町通 五条上ル 藤井佐兵衛藏」とある。『国書総目録』には文政四刊とあり、本書は明治の後印本である。

38 太平新詠（文政五年序）縦一六・七×横一一・五 三卷一冊

ナ8  
125

狂詩。縹色表紙。左肩に四周単辺題簽「太平新詠」。序は四周単辺六行野、本文は同七行野（匡郭内一三・二×八・二）。一行一四字。序二つ二丁と四丁。本文二四丁、全三〇丁。見返しに「鈍狗齋定本（上段横書き）」、「太平新詠」「愚佛先生滑稽詩新詠句成至テ刻ニ之ヲ此本買者ヲ並ニ道ヲ築ル繁ニ昌ニ寔ニ無ニ疑ヒ 間拔山人題」「匹澤樓開雕」と「匹澤樓印」の印文。序題は「眉言」下に「一寸先闇」の印文。序末に「文政壬午春二月初午日／鷓江イッコウノジンテイコトル任鼎湖フシテト摻筆於兎鹿齋中ロク／三才童チノサイ知築塞書チノサイ」「鷓江」「任鼎湖印」「兎鹿齋」「（手形）」の印あり。「太平新詠序」は「文政壬午正月／浪華 順齋序」と「順齋」「柳」の印文。内題は「太平新詠卷之一（一〜三）」、内題下署名は「伊宗老／無徹方／虚魯才同校」。内容は愚仏先生及び序者の兎鹿齋、順齋などの狂詩七六首を収める。猶、卷末に「匹澤樓狂詩品目」

として、安穴先生著の「太平新曲」「太平二曲」「太平三曲」、愚仏先生著の「太平風雅」「太平新詠」「太平詩集」「太平文集」「続太平文集」「続太平楽府」の書名がみえ、「京都千本通一条下ル町 書林 堺屋伊兵衛版」とある。

39 馬鹿集（文政九年以降刊）縦一七・二×横一一・八

ナ8  
118

狂詩。縹色表紙。左肩に四周双辺原題簽「狂馬鹿集 全」。四周単辺無野で、序跋同四行、本文同七行（匡郭内一三・一×八・二）一行十四字。序二丁、跋一丁、本文十二丁、全一五丁よりなる。刊記の類はないが、跋は「馬鹿集述懐／任<sup>テニ</sup>口吐<sup>ハキタ</sup>戯言<sup>ウタ</sup>」吐<sup>キツク</sup>盡<sup>クヒテ</sup>今<sup>イマ</sup>思<sup>オモヒ</sup>知<sup>ル</sup>偽<sup>イナ</sup>事<sup>コト</sup>長<sup>ナガ</sup>不<sup>レ</sup>遂<sup>ズ</sup>頓<sup>ヤク</sup>兀<sup>ク</sup>此<sup>コノ</sup>虚<sup>ウソ</sup>皮<sup>カ</sup>／兆<sup>チョウ</sup>載<sup>サイ</sup>坊<sup>ボウ</sup>（花押）」とある。内容は四一編よりなるが、卷末の「丁亥立春」「文政第九丙戌冬折<sup>テ</sup>指<sup>ビラ</sup>筭<sup>スレハヒ</sup>用<sup>ニ</sup>齡<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>重<sup>ク</sup>入<sup>ル</sup>組<sup>ム</sup>六<sup>十</sup>一<sup>年</sup>夢<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>朝<sup>ノ</sup>皆<sup>サ</sup>覺<sup>ル</sup>百<sup>八</sup>鐘<sup>ノ</sup>」の詩により、作の年、著者の年齢も知られる。また卷頭の「述懐古詩」中に、滅方海、有頂点、陳奮翰の字句を使用するのは作者を推定させるものである。作中に「勢多橋」「大津」「清水」「八坂塔」等、京師を詠む一連の作が目につく。また裏見返しに「竹笥楼製本部」（錢屋惣四郎）の朱印記がある後印本である。

40 狂詩浚井鮒（刊年不明）縦一八・一×横一二・〇 上下二卷一冊

ナ8  
121

狂詩。縹色地に金砂子散しの表紙。左肩に子持粹題簽「浚井鮒有頂點」。序・本文とも四周単辺八行野（匡郭内一・二・六×九・三）、一行は序十二字、本文一六字。序二丁、本文十一丁、全十三丁。見返し「鈍齋先生著／浚井鮒／薩摩堀三拳拂蕭埜軒粹」及び「不許下戸肴荒」の印文。序題「浚井鮒序」。内題「浚井鮒卷之上（下）」、序末に「君百妾九十九」「共生白髮」二顆の朱印。内題下署名「宋 龍沈 録／日本 有頂 點」と戲号を記す。尾題「浚井鮒卷之上（下）終」。柱刻「浚井鮒」下部に「序」の字及び丁付を付す。収める狂詩三十四編は全て忠臣蔵を詠んだもので、書名も忠臣蔵三段目の文句「井戸の鮒」云々に拠る。忠臣蔵取材の先行作には文化二年狂言堂の「忠詩選諺解」、半可山人の「日本一阿方鏡」等がある。作者鈍齋先生の伝は未詳。近世風俗研究会刊『未翻刻狂詩九

種』に影印と解題がある。

41 思出草（新写）縦二三・八×横一六・三 四卷二冊

82 1

隨筆。布目地に薄紫細格子が入る紙表紙が（乾）の冊で、同じく鼠色の細格子が（坤）の冊である。左肩に、「冠山公思出草 乾（坤）」と記す白紙に茶砂子散らしの乾冊、同緑色の散らしの坤冊、の題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。乾冊は扉一丁、序二丁、目録一丁、本文五四丁、坤冊は扉一丁、本文四八丁。序は一面十行、一行約二五字。本文は、卷一が十二行、卷二以降が十一行、各行約三二字である。扉「池田冠山侯／思出草」。序は「天保三のとしみつのへたつの冬／晁嶠陳人書」と閉じる。つづいて「思出草卷一／目録」とあり、次の項目を立てる。

「君臣ノ事、世ノ諺ノ事、冥加ヲ知ル人ノ事、輝政卿ノ事、光仲朝臣ノ事、称呼ノ事、懼ルヘキノ事、風俗ノ事、高祖ノ事、公卿ト称スヘキノ事、貴人ノ事、華奢風流ノ事、足輕具足ノ事、謬傳ノ事、火災ノ時ノ事、宗室ノ事、家ノツタエノ事、家系ノ事、大名ソダチノ事、思ヒヤリノ事」。本文は乾冊の三三丁表（裏白丁）で、同丁末に「思ヒ出草卷一終」と尾題を記す。三三丁以下には、源融公ノ事、音楽ノ事、平忠度ノ事、玉津島明神ノ事、源氏物語、品サダメノ事、和字ノ事、方言ノ事、無筆ノ事、愚ヲヤシナフ事、民ノ膏血ノ事、菓子ノ事、書画ノ事、奴婢ノ事、松平定信朝臣ノ事。奸吏ノ事、池田炭ノ事、武鑑ノ事、矢人函人ノ事、金神除ノ事、學校ノ事、藝文志ノ事、の項目名で記述されており、卷数表記はみられないが、卷の二に相当する。また坤冊は、内題「思ヒ出草卷三」、目録を置かずに直接本文が始まり、論より証拠ノ事、異端ヲ闢ク説ノ事、続経ノ事、理一分殊ノ事、名字飯ノ事、蕎麥ヲ嗜ム人ノ事、物ハノ事、藤戸ノ事、伊藤東厓ノ事、唐詩選ノ事、前太平記ノ事、大成経ノ事、萬浪和尚ノ事、或禪師ノ事、院號ノ事、金毘羅神ノ事、殺生戒ノ事、飲酒戒ノ事、二王小屋ノ事、木乃伊ノ事、吳魚吳音華、大口也ノ事、物ノ名ノ事、稲妻路ノ事、細川重賢朝臣ノ事、本田野州ノ事、箕浦長孺ノ事、茶師ノ事、狩野氏父子ノ事、と本文

二六丁表九行まで続き、裏が白丁で、二七丁以下に、諸禮之事、猿楽ノ事、太鼓ノ事、狂歌俳諧ノ事、寶井其角ノ事、崎女ノ事、歌舞妓座ノ事、南海入道ノ事、無稽ノ事、唱蘭画ノ事、変遷ナキ地ノ事、速成人ノ事、棒組ノ事、風月社ノ事、杏花園ノ事、校書ノ事、不思議ノ事、詩文章ノ事、如是觀ノ事、の記述がある。四卷二冊の体をなしていることが分かる。

42 思出草 続篇(新写) 縦二三・八×横一六・三 四卷一冊

82 2

隨筆。布目地に薄紫細格子が入る紙表紙。左肩に「冠山公思出草 続篇」と記す白紙に茶砂子散らしの題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。扉一丁、本文七九丁。一面十一行、一行約三二字。扉題は「池田冠山侯ノ思出草續篇」と記す。内題は「思ヒ出草續編卷一(一四)」内容は卷一、笹ノ雪ノ事、暑寒見廻ノ事、事実ハタシカナラヌ事、論語徴ノ事、参議ヲ三木ト書ク事、桂香院殿ノ事、宿望ハ必ス達スル事、老女瀧尾カ事、訓點ノ事、平等差別ノ事、善ク誤ル字ノ事、官名ヲモテ通称トスル事、卷二、並称スル人ノ事、一日ニ四時アル事、治ニ乱ヲ忘サル人ノ事、祭ル神ヲ誤ル事、演劇ヲ信スル事、異説ヲ好ムハ腹アシキ人ナル事、新太郎少将ノ事、御感状ノ事、同姓相親ムヘキ事、羅漢寺ノ事、白無垢ノ事、大名妻女ノ事、鄙劣ナル人ノ事、杉本信晴ノ事、アル大名ノ事、三王外記ノ事、松平右京大夫頼前朝臣ノ話ノ事、政方頼致物カタリ、摂津守澄猶ノ事、物ノ名ライム事、物ノ理ヲ窮ムル事、卷三、浅草海苔ノ事、倭漢三才圖繪ノ事、梅若ノ事、天山ノ号ノ事、冠山ト号スル事、都鳥ノ事、桃ヲ栽ル事、吉益周助ノ事、以呂波ノ事、芭蕉翁ノ事、石山形ノ硯ノ事、塙檢校ノ事、若松屋七右衛門カ事、神ハキネガ習ハシノ事、源五郎鮒ノ事、風土記遺編ノ事、有無ヲ通スル事、人力ノ及ハサル事、古人ニ比スル過リノ事、弘福寺ノ事、田畑吉正ノ話ノ事、英一蝶ノ事、謡モノノ誤ノ事、深草元政ノ事、教禪ノ事、卷四、池田氏家紋ノ事、姫路城ノ事、物祖徠和歌解話ノ事、鉢木ノ謡ノ事、外戚ノ臣ノ事、広瀬以寧ノ事、喪祭ノ事、物部守屋ノ事、家譜集成ノ

事、留思ノ記ノ事、である。作の成立は、「留思ノ記ノ事」中に「コトシ天保三年ノ冬……」とあるから、正編同様に天保三年頃となる。巻末に「晃嶠陳人書」とある跋文が記される。池田冠山は、文化文政期において佐伯侯毛利高標、仁正寺侯小橋長昭とともに大名の三学者と呼ばれた人。因幡若桜藩主で名は定常（明和四―一七六七―年）正保四―一八三三―年）。「学に篤く、佐藤一斎に就いて研鑽すること実に四十余年、古今和漢の書、地誌仏典に至るまで涉獵せざるものなく、また諸芸に練達し、その訪問する者貴賤に関はず引見して諄々と交はる」（大人名事典）という人であった。猶、「思出草」に関しては、福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』、七七五頁以下を参照されたい。また、『国書総目録』によれば、鳥取池田家、内閣文庫、中山久四郎、の三者に蔵されている。

43 紫苑（新写）縦二四・四×横一七・二

82 40

随筆。布目地に鼠色の細格子が入る紙表紙。左肩に「戸沢正令侯／紫苑」と記す白紙に緑色散らしの題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。扉一丁、本文一二丁。一面、十一行、一行二十字前後。扉題「戸沢正令／紫苑 全」内題「紫苑」。内容は、小蓋、きりくすこほろぎ、朝貌、いものきぬかつぎ、玉もの前の事、酒呑童子退治、馬や、哥、寺のかやふき、皇朝の仏法、人の性、の考証からなる。戸沢正令は、新庄侯能登守（大和守正胤の子、外舅に堀田正敦あり）、薩摩の島津栄翁侯の女婿で国学の嗜が深く、勤王の志が厚かった人であり、煎茶を好み、画も住吉派の渡辺広輝に学んだり、多方面に活躍したが、天保一四（一八四三）年、三一歳の若さで没した。猶、福井久蔵に『戸沢正令侯と其著作』（昭和一三年刊）があり、この「紫苑」も翻刻されている。

44 謡曲口伝鈔（昭和八年写）縦二三・七×横一六・五 一冊

82 73

謡曲。布目地に鼠色の細格子の入る紙表紙。左肩に「龍沢公／菅公御縁起／謡曲口傳鈔／合」と記す白紙に茶砂子散らしの題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙。扉に、「菅公御縁記／謡曲口傳抄／合一」とあり、次の中扉は「菅公

御縁起」で、次の二丁に「菅公御縁記」の本文がある。次いで第五丁表に「利保公御隨筆／謠曲口傳」と記した中扉がある。以下「謠曲口伝鈔」について記す。内容は「利保公謠曲口伝鈔一名七寶秘藏鈔<sup>ト</sup>モ」と「能物語」からなる。前者一二丁、後者一七丁。ともに一面二行、後者一行約一八字。前者は「謠曲替手口伝簡条」と題して、高砂、田村、熊野から当摩まで四五番の曲について、足ヅカヒ、一声心得、替手之事など、それぞれの曲に即した口伝の項目を列挙するものである。曲名に朱の通し番号を付し、各項毎に朱印を頭に付す。後者の「能物語」は「先年公邊御改正のとき水野越前守より申されしには能に花美の装束をもちうる事此時節不相當なり……」と始め、高砂、熊野、鵜飼、兼平と、各曲目に關しての演じ方、演じた体験など、装束舞方謠方所作などの古実秘伝を記した。猶『諸大名の學術と文芸の研究』七一四頁以下を参照。著者、竜山侯、前田利保（寛政二二—一八〇〇—年）安政六一—一八五九—年）は富山藩主にして国学者。姓は菅原、字は伯衡。清薫、存樹、自知館、千歳、恋花圃、万香亭、弁物舎、と号した。藩政に關しても一代の名君と称されたが、その事蹟は、むしろ国学、本草学に關して注目されるものがある。『本草通串』九四卷など、また語格活用や歌集日記の類も忘れえないものがあり、「その學識精力驚歎に値し、若し単なる庶民なりせば、學名を以て却て多くの世に知らるべきであつた」（大人名辭典）と云う。猶初丁扉の裏に「前田侯爵家藏竜沢公御自筆本より昭和八年七月二日影写す」と記す。伝本は『国書総目録』によれば、京大、金沢市加越能、田中允の各蔵本が知られる。

45 菊の下水（新写）縦二三・八×横一六・五 一冊

82 13

謡曲。布目地に鼠色の細格子の入る紙表紙。左肩に「備中木下侯／菊乃下水／謡曲」と記す白紙に緑色の散らしが入る題簽を貼る。袋綴。料紙は三極。墨付七丁（能四丁、狂言三丁）、一面能九行、狂言八行、能一行三四字、狂言二九字ほどである。内題は「菊の下水」、下に割書きで「初メ作物出ス井筒ニ菊ノ花一本脇僧一人水衣着流し／

珠数扇三人僧ニモスル也」と記し、狂言の部分は「同狂言 作者同上」と記す。新作の謡曲で、他に伝本は番外謡本のうち上掛り番外謡五八冊本とある国学院大学蔵の江戸末期写本（二六二番）中にあることが、『国書総目録』に記されている。本作は、諸国一見の僧が備中の長良の里にて一人の女性（菊花の精）に会い、菊水の由来を聞くと言う内容である。作者、木下侯は木下公定（慶安元—一六四八—年—享保一五—一七二五—年）で、江戸初期の備中足守藩主である。葵峯と号す。「延宝七年藩学を興して追琢館と称し、大いに文教を作振し、翌八年丹後宮津の城番となり、元禄十四年赤穂城浅野氏の国除さるや城受取に向った」（大人名事典）人であり、木下利玄の先祖としても知られる。

46 平家語様聞書（新写）縦二四・〇×横一六・五

82 101

平曲。布目地に薄茶細格子が入る紙表紙。左肩に「平家語様聞書」と記す白紙に緑色散らしの題簽を貼る。袋綴。料紙は三極。扉一丁、本文六丁。行数不定。扉に「寛文八年戊申九月廿五日／同廿九日／十月八日／平家語様

聞書／九月廿六日當着／十月十一日發足／並河檢校安一」とある。巻末には「其平家ヲ語ハ先平家ヲ可知シ平家ト云ハ五ノシナ三ノ佐法在リ五ノシナト云ハ一ニハ音聲ニニフシ三ニハ色四ニハ覚五ニハキラン是也三ノ佐法ト云ハ一ニハ琵琶二ニハ形儀三ニハ座付是也此八迄存知らえるも平家を不知ハ上手トハ名付カタシ供々分別シテ八をわきまへ別而ハ根本之平家をむねと納（判読不能）□□せは上手成へし依如件／元和五己未十一月十八日」と記されている。片々たる小冊ながら、この種の芸道論として、他に寛永八（一六三一）年の成立かとされる前田九一（推定）の手になる『西海余滴集』（古典文庫第一〇九冊）あたりが知られるだけであるから、貴重なものとすべきであろう。猶、前田

九一、並河安一はともに慶長頃の平曲の名人といわれた高山誕生一の門である。本書は寛文八（一六六八）年に並河安一から松平輝綱（『諸大名の学術と文芸の研究』参照）が伝授を受けたものであり、内容としては前掲書とほぼ

平行する時期のものと思われるが、両者のズレも見られる。また巻末部分の元和五（一六一九）年の記述は、あるいは他の伝書からの抜書きでもあろうか。著者、輝綱（元和六一一六二〇―年）寛文一一一六七一年）は、武蔵川越藩主。松平信綱の子、甲斐守。弓箭兵仗の備常に精しく、物具鎧の類まで武士の手本となった人という。

47 六義園八景和歌（新写）縦二三・九×横一六・二 一冊

82  
132

和歌。蕉茶地に亀甲つなぎの空押しをする紙表紙。左肩に「柳沢美濃守百首／正親町々子如葉集／合」と記す白紙に緑色散らしの題簽を貼る。袋綴。料紙は三楹。墨付六五丁（扉二丁を含む）。一面八行。一首一行書き。外題の如く二作の合綴になる、前半は扉題「仙洞御加点の分／柳澤吉保和哥」と記し、詠百首和歌、和歌十首、和歌十首、詠草三十首、大樹公六十御賀和歌三首、詠草十五首、詠草七首、和歌七首、詠草五首、以上九種の詠草と、仙洞御所に添削を依頼する正親町公通への書状と、公通の返信をそれぞれの詠草の後に付す。以上三三丁。吉保の九通の手紙の内、初の三通は「松平美濃守」の署名、次の三通は無署名、次の三通は「甲斐少将」と署名する。後半は扉題「正親町々子／如葉集抄」と記され、巻頭に「如葉集一」の内題を持ち、その下に「柳沢吉保夫人町子集三卷」とあるのが一丁、次に「如葉集二」として二丁、続いて「仙洞勅點／勅撰六義園八景」八首二丁、「仙洞勅點／勅撰六義園十二境」十二首二丁。「百首 中院通躬卿御点」が一四丁。そして「如葉集三」が十丁で終わる。後半の中間部を占める勅点、加点の和歌が如葉集の一部であるのか不明な点がある。六義園は、吉保（万治元―一六五八―年）正徳四―一七一四―年）の別業として著名。甲斐少将の名は、宝永元（一七〇四）年に甲府に移封されたのでその名がある。前掲の勅点等の和歌はその時期の作かと思われる。將軍綱吉の寵臣として知られる吉保の最後の華やかな様を告げる一時でもあろう。公通（承応二―一六五三―年）天和二―一七三三―年）は、吉保夫人町子（享保九―一七二四―年没）の兄にあたる。

48 源女竟宴和歌（江戸末期写）縦二四・四×横一七・一 一冊

82 93

和歌。布目地に薄紫細格子が入る紙表紙。左肩に「松平家／源女竟宴和哥」と記す白紙に緑色散らしの題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。墨付十丁（扉・跋各一丁、序三丁。本文五丁）。序、本文は一面十一行、跋十行。扉「源女竟宴和歌」。序末に「天保の十年あまり一年のしはすはしめに／松たひらの榮子しるす」とあり、本文は上部に源氏物語の五十人の女性の登場人物名を記し、その下に和歌五十首を記し、それぞれの詠者名を別筆で注記する。五十人の詠者は松平榮子、松平周防守侯、戸沢能登侯を始めとして、松平家にゆかりのある人々である。本書作成の事情については、序跋に詳しい。今跋文を左に記す。「おのれ若かりし頃よりいともかしこくやむことなき／君たちの御まへにめされてくさ／のふみとも／よみときける中に源氏のものかたりをむねと／よましめ給へれとあるはえさらぬさはりありて／なからにてやみあるは長きにうみてあき給ひ／又はあたしふみにかへてよむへくのたまひなど／こゝもかしこも皆かくよみはてつるはをさ／／なかりしを鳥とりのにひ田しろしめす殿のみことのおもの君の御まへにて五十／四帖のこるくまなくはたしつるはまれ／／の」事なれはいかてをんのうたけせんとせちに／のたまはするに是はいとよき事なりとて／やかて其宴し給ひて物語の中なる／男たちはさし置て女のかきり五人えり／出てかた／／にくまり物してかくとりつと／へたるになんさるは女君にてかくまめ／やかなる御こゝろはへのかしこくめてたき／をいかて世にしらしめんとていさ／／か／其よしはしつかたにしるせるのみ／天保十一年のしはす 七十三翁 藤原彦磨」。斎藤彦磨（安永二―一七七三年）安政六―一八五九一年）は国学者。「源氏難語抄」「勢語凶抄」等の著作がある。

49 賢歌愚評（明治四四年写）縦二五・〇×横一六・五 一冊

82 97

歌学。布目地に薄茶細格子が入る紙表紙。左肩に「賢哥愚評附春秋吟」と記す白紙に緑色散らしの題簽を貼る。

袋綴。料紙は楮紙。墨付四〇丁。うち、扉、序、跋、奥書の各一丁を含む。行数不定。扉は「賢哥愚評／楽翁公春秋吟」と記す。序は「いにし年白河少将住吉奉納百首と題せる／ものを足立四位か家にて見る楽翁公か歌を／清水濱臣か評せしにておもしろきものなれば／かりきて寫し余かおもふ旨なと半までは書し／るし／か紛るゝことありてそかまゝうちおき／つるを此程香亭翁かもとにて賢歌愚／評と題せるをみるにかの住吉百首と同じ／ものなれば余かもてるを翁にもみせたりしに」賢歌のかたには濱臣か評につきて齋／藤彦磨か説もあれば翁手つからそれ／を我本に書入れ返しおくられさらに／余か評をも末まで書そへむ事をそゝ／のかさるゝまゝにおもひおこして今日な／むおろゝゝ書をへたればやかてそのよし／しるしおくなり／四十一年四月廿七日／不盡のやの／あるし」と記されてゐる。つづいて「春秋吟 白河少将殿」十二丁があり、楽翁の「春の夕の吟廿首」と「秋の夕の吟廿首」の計四十首と、歌の左に清水濱臣の評が同筆で記され、上部空白及び行間に朱注と墨書注が入る。なお、末二丁半に浜臣の奥書きが転写されている。次に「住吉百首和歌 白河少将殿」二五丁があり、前者と同様、楽翁の百首本文と浜臣の評が同筆で書かれ、朱注及び墨書注が加えられており、末三丁半に浜臣の奥書き、次一丁に齋藤彦磨の奥書きが転写されている。浜臣の両奥書によると、春秋吟は文化五年正月廿六日に受け取り、評したもの、百首は同年二月に評したもの。最終丁には「明治四十四年／二月廿三日／今泉定介ぬしの蔵本によりて寫す」の識語がある。

50 研覃居詩集（新写）縦二四・四×横一六・三 二卷一冊

82 61

漢詩集。焦茶地に菱形柄子つなぎの打出しのある紙表紙。左肩に「熊本侯研覃居詩集」と記す白紙に緑色散らしの題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙、三極など混用。墨付五三丁、一面九行、一行二〇字。扉「熊本侯／研覃居詩集」、内題「研覃集卷一（二）」。序、跋の類なし。熊本侯は細川宣紀（延宝四—一六七〇年）享保一七—一七三二年）のことであり、細川氏は幽齋以来風雅の名が高く、幽齋の曾孫である綱利も詩作があり、一首詩纂に来る。

宣紀は熊本藩主、若狭守利重の第二子、竹之丞、利武と称したが、宝永五年に綱利の嗣となり、翌六年元服、將軍家の宣の字を賜い宣紀と改めた。正徳二年以後、越中守。号を研覃居という。詩集は、二巻で、三百首以上にのほろ。ただし本書所収のものは癸卯・甲辰の二年即ち、享保八年及び九年の作であり、所詠の一部にすぎない。「述職の途上豊後鶴崎の発船より浪華に到り淀川を浜りそれより海道を旅行するに方り船中若しくは薩埵峠等にての作もあれど、和韻のもの多く、江村宗因、同宗石、秋山定正、井上有基、水足安貞、友岡貞典、林三陽、林祭酒、天柱和尚、細井知慎その他の人々と互に吟和せるもの集中七八分、その他詠物詠史も多少交れり。癸卯歳旦種々の人々と和韻せるものゝみにても十数首あり、達吟なりしこと知るべし。」（『諸大名の学術と文芸の研究』六一六頁以下）。

51 寛齋詩鈔（新写）縦二三・九×横一六・八 一冊

82 53

漢詩。布目地に薄茶細格子が入る紙表紙。左肩に「高遠侯 寛齋詩鈔／水戸鼎山公 源哀公詩／式」と記す白紙に綠色散らしの題簽を貼る。袋綴。料紙は三椏。題簽にあるごとく二作を合綴したもので、扉各一丁、本文八丁と三丁から成る。前者は、扉「高遠内藤侯／寛齋詩鈔」、内題は「寛齋詩鈔」と記す。一面八行、一行一四字。「櫻雨」「華下歩月」以下三七首の七言絶句が記され、全首朱による添削が施されている。「高遠侯内藤駿河守頼寧は寛齋と号し、文政三年家督をつぐ。致仕の後は清閑と号す。寛齋詩鈔一卷朱批を加へたる稿本内藤頼輔子爵家にあり。詩数多からず。」（『諸大名の学術と文芸の研究』六六六頁）。猶、付載の「源哀公詩」は扉「松平覚義君蔵／水戸源哀公詩」とあり、本文は「山居四時雜詠」として四首を記す。一面六行、一行一四字。卷末に「文化十一年歳在甲戌仲夏日／鼎山詠」とあり。源哀公は、徳川斎修（寛政九一―一七九六―年）文政二一―一八一九―年）、水戸藩主。「斎信、資性篤孝にして謹直、敢へて過失を犯さず、また好學にして書画を善くした」（大人名辞典）という。

## 諸大名著作コレクションについて

このコレクションは、昭和一二年厚生閣刊の大著『諸大名の学術と文芸の研究』（昭和五一年原書房刊の復刻あり）の材料となった福井久蔵氏旧蔵書の一部で、写本一三七点一四一冊よりなる。

内容的には、やや文学関係にかたよっており、元のコレクションの多様な分野をそのまま反映したものではないが、それでもなお大名著作のコレクションとしては有数のものであり、福井久蔵博士の研究の足跡をたどることができる点において、コレクションとして残すにふさわしいものであるといえる。

個々の資料は、諸大名の著作原本ではなく、ほとんどがいわゆる新写本であり、うち数十点については、福井氏の識語から、それらが正末年から昭和初年にかけて、福井氏自身が大名華族家から借覧して書写したものであることが知られる。書写から既に半世紀を経過した現在、原資料が散逸したのも少なくないことが推測され、また、実際、前掲書によってのみ名が伝えられた著作も多く、貴重なコレクションである。

著述者である大名としては、新庄侯戸沢正令・富山侯前田利保の二人のものが多く、特に、前者については、福井氏は別に『戸沢正令侯とその著作』（昭和一三年厚生閣刊）を著わしている。その他については一覽に譲るが、全体として、

近世大名の文化活動の一端を伺い知るには恰好のコレクションであろう。

なお、このコレクションの資料は、昭和五一年度に古書籍商より一括で購入したもので、すでに『国文学研究資料館報』第7号掲載の「新収資料紹介④」で紹介してはいるが、一般和古書の扱いで、他と区別されてはいなかった。しかし、コレクションとしての扱いを望む意見もあつたので、さきに述べたようなコレクションとしての貴重性に鑑み、昭和五六年度の貴重書指定小委員会において、特別別置資料のうちの特別コレクションとして指定されたものである。

また、『国文学研究資料館蔵和古書目録 一九七二—一九八一』には、全点が収載されており、掲載項目数としての書名点数は、複数著作の合写本等がそれぞれの書名項目にとりあげられている関係上、一八一点となっている。

諸大名著作コレクション一覧

〔凡例〕

- 一、この一覧は、諸大名著作コレクション全一三七点（一四一冊）を収録したものである。
- 一、排列は、請求番号順とした。
- 一、請求番号は、概ね著者（諸大名）の五十音順につけられており、コレクションを表わす配架分類記号「82」とそれぞれの図書番号よりなる。

一、記載は通番（前述の図書番号と同一）、書名、著者名に、大まかなジャンル（『国書総目録』準拠）を添えた。

複数著作の合写本は、同一番号の下に書名等を併記した。

冊数は、明記したもののほかは、すべて一冊で記載を省略した。

一、\*印は、今回出展の資料を示す（本文解説あり）。

* 1	思出草（池田冠山著 二冊）	隨筆	6	崇岳詩集（大河内信明著）	漢詩
* 2	思出草（池田冠山著）	隨筆	7	松平信明公の消息（大河内信明著）	書簡
3	金湯詩十章（池田冠山著）	漢詩	8	嵩岳君言行録（安間敬長著）	伝記
	飢肥侯読家乗（伊東李門著）	漢詩	9	吉田侯御家法見聞集	法制
	弘道館記跋（徳川斉昭著）	教育	10	練革私記（大関増業著）	武具
4	新太郎少将書翰集（池田光政著）	書簡	11	立教詳義（太田全齋著）	教訓
5	切齒詩説（大河内輝照著）	漢詩	12	残香録（梶原景毅著）	伝記
			* 13	菊の下水（能の本のうち）	謡曲
			14	擬独語（朽木鋪綱著）	雑記
			15	岩間の水（朽木倫綱著）	教訓
			16	朽木家乗	伝記
			17	秋月侯問安余録（黒田長元著）	教訓
			18	秋月侯静修軒漫録（黒田長元著）	雑記
			19	日観公記録（近藤幸殖編）	伝記
			20	玄武日記（酒井忠以著）	日記
			21	鷺山公文抄（酒井忠恭著）	漢文
			22	酒井忠道侯文集（酒井忠道著）	漢文
			23	拾草和歌集（酒井忠道著）	歌集
			24	榊原家三十三誌（榊原政祐著）	法制
			25	榊原政祐侯政令（榊原政祐著）	法制
				師律教戒（榊原政祐著）	法制
				師律要略（榊原政邦著）	法制
				衿鞆録（生重進著）	教訓
				尼ヶ崎侯政要問答（桜井忠栄著）	政治

- |      |                      |     |      |                 |    |
|------|----------------------|-----|------|-----------------|----|
| 26   | 夜据物語 (佐善礼耕著)         | 放鷹  | 47   | 鄙の鶯 (戸沢正令著)     | 隨筆 |
| 27   | 画法綱領 (佐竹曙山著)         | 絵画  | 48   | 皇朝魂の辯 (戸沢正令著)   | 神道 |
| 28   | 真田貫道手記 (真田貫道著)       | 雜記  | 49   | 黄泉の掟 (戸沢正令著)    | 隨筆 |
| 29   | 秋香亭句集 (傘露著 二冊)       | 俳諧  | 50   | 瑞子君文集 (戸沢瑞子著)   | 和文 |
| 30   | 百寄塚碑和解 (宜周著)         | 放鷹  | 51   | 旅日記 (戸沢瑞子著)     | 紀行 |
| 31   | 摘要冠辞考 (田安宗武著)        | 語学  | 52   | 戸田忠至集 (戸田忠至著)   | 歌集 |
| 32   | 藤堂絢菟公和歌 (藤堂高猷著)      | 和歌  | * 53 | 寛斎詩抄 (内藤頼寧著)    | 漢詩 |
| 33   | 癸丑辺海事小策 (藤堂高聰著)      | 海防  | 54   | 源哀公詩 (徳川斉修著)    | 漢詩 |
|      | 和戦につきて (藤堂高聰著)       | 海防  | 55   | 垂孫金城録 (中垣謙斎著)   | 伝記 |
| 34   | 景山遺稿 (徳川斉昭著)         | 文集  | 56   | 観頤荘記 (鍋島綱茂著)    | 文集 |
| 35   | 慎終論 (徳川治貞著)          | 倫理  | 57   | 鍋島直与長歌集 (鍋島直与著) | 歌集 |
| 36   | 温知政要 (徳川宗春著)         | 教訓  | 58   | 里蚕集 (蜂須賀光隆著)    | 歌集 |
| 37   | 今世俳諧歌弁 (斎藤彦磨述 戸沢正令記) | 狂歌論 | 59   | 漢台遺稿 (久松定昭著)    | 漢詩 |
| 38   | ことばのしもと (戸沢正令著)      | 語学  | 60   | 土津神君詠 (保科正之著)   | 和歌 |
| 39   | 木の芽の根ざし (戸沢正令著)      | 茶道  | 61   | 保科正之公歌集 (保科正之著) | 歌集 |
| * 40 | 紫苑 (戸沢正令著)           | 隨筆  | * 62 | 研覃居詩集 (細川宣紀著)   | 漢詩 |
| 41   | 述懐論第一条 (戸沢正令著)       | 国学  | 63   | 観文禽譜序 (堀田正敦編)   | 動物 |
|      | 草々稿 (戸沢正令著)          | 雜記  | 64   | 水月詠藻 (堀田正敦著 三冊) | 歌集 |
| 42   | 題詠論 (戸沢正令著)          | 歌学  | 65   | 水月文章 (堀田正敦編)    | 文集 |
| 43   | つぼの白雪 (戸沢正令著)        | 隨筆  |      | 勸忠書 (堀田正俊著)     | 教訓 |
| 44   | 鍋島直与に答ふる書 (戸沢正令著)    | 歌学  |      | 芥説 (堀田正俊著)      | 漢学 |
| 45   | 庭のりの記 (戸沢正令著)        | 歌文  |      | 颺言録 (堀田正俊著)     | 伝記 |
|      | 戸沢正令侯百首 (戸沢正令著)      | 和歌  | 66   | 克己書 (堀田正俊著)     | 倫理 |
| 46   | 鄙の鶯 (戸沢正令著)          | 隨筆  |      | 堀田正俊公家集 (堀田正俊著) | 歌集 |

67	軍記 (堀直寄著)	兵法	86	本草学の事 (前田利保著)	本草
68	当流羽合寄方 (堀江左次右衛門著)	放鷹		歌物語 (前田利保著)	歌学
69	山崎侯本多寿齋文集 (本多寿齋著)	漢詩文		能物語 (前田利保著)	謡曲
70	前田利常公伝	伝記		世物語 (前田利保著)	随筆
71	霰くだき (前田利保著)	語学		癖の事 (前田利保著)	随筆
72	歌道随筆 (前田利保著)	歌学		化物語 (前田利保著)	随筆
*73	竜沢公御随筆 (前田利保著)	随筆	87	むかへこと道行ふりおほせかき (前田利保著)	歌学
	菅公御縁起 (前田利保著)	記録		題詠心得 (前田利保著)	和歌
	謡曲口伝抄 (前田利保著)	謡曲	88	幽時言串説 (前田利保著)	語学
	能物語 (前田利保著)	謡曲	89	吉野奥導 (前田利保著)	語学
74	清きなぎさ (前田利保著)	和歌	90	波奈賀都美歌集 (牧野忠敬夫人著)	歌集
75	蜘蛛のいとすぢ (前田利保著)	語学	91	覚樹院御諭言 (牧野富成著)	教訓
76	古今和歌集夜話 (前田利保著)	歌学	92	祭祀大意 (松倉子令著)	祭祀
77	山途轟々 (前田利保著)	文法	*93	源氏竟宴和歌 (松平栄子著)	和歌
78	兹訓 (前田利保著)	語学	94	老子厲案抄 (松平定綱著)	漢学
79	信筆鳩識 (前田利保著)	本草		光明管見解 (松平定綱著)	漢文
80	神用品々 (前田利保著)	語学		牧民後判 (松平定綱著)	政治
81	専門余言 (前田利保著)	語学	95	大崎別業遊覧記 (松平定信著)	随筆
82	竹のふしのま (前田利保著)	語学	96	求竜説 (松平定信著)	漢文
	玉くだき (前田利保著)	語学		松平越中守殿御心得書 (松平定綱著)	政治
	五十音内外伝 (前田利保著)	音韻	*97	賢歌愚評 (春秋吟・住吉百首) (松平定信著)	歌学
83	近隣 (前田利保著)	歌学		清水浜臣評)	歌学
84	豊葦原 (前田利保著)	語学	98	源氏日記 (松平定信著)	随筆
85	飛蛙福々 (前田利保著)	語学	99	楽翁公諸規定	法制

100	衣類之事 (松平輝綱著)	武家故実		
101	平家語様聞書 (松平輝綱著)	平曲		
102	騎射 (松平信輝著)	武家故実		
103	泰河堂詩集 (松平信復著)	漢詩		
104	野火止紀行 (松平信順著)	紀行		
105	吉田のなぐさ (松平信順著)	和歌		
106	松平正之公言行録	伝記		
107	多葉粉の伽 (松平宗矩著)	隨筆		
108	康圭公百首 (松平康圭著)	和歌		
109	菊経拔萃 (松平頼寛著 五狂編)	植物		
110	漫筆 (間部詮勝著)	隨筆		
111	間部詮勝侯教訓	教訓		
112	池田冠山侯家訓及婦女教訓要草 (池田冠山著)	教訓		
	城代規格 (水野忠邦著)	法制		
	閣老記聞 (水野忠邦著)	法制		
113	水野越前守密書 (水野忠邦著)	政治		
	日野資愛卿書翰 (日野資愛著)	書簡		
114	遺老閑話	伝記		
115	丕揚録 (塩谷宕陰著)	系譜		
116	新発田侯開版評議 (溝口健斎著)	書誌		
	溝口直養侯疑問 (溝口浩軒著)	教育		
117	勸学説 (溝口浩軒著)	教育		
	夢中のはなし (溝口浩軒著)	教訓		
118	示子孫及諸臣書 (溝口浩軒著)	教訓		
			119	示傳官筆記稿 (溝口浩軒著)
			120	示直臣若將勸読書筆記稿 (溝口浩軒著)
			121	溝口浩軒公火中草稿 (溝口浩軒著)
			122	溝口浩軒公令
			123	本草研究に関する書翰 (溝口直侯・小野蘭山著)
			124	新発田侯諸規
			125	溝口侯継封三紀
			126	毛利公定侯歌集 (毛利公定著)
			127	雅衍 (毛利高標著)
			128	露山集 (毛利敬親著)
			129	船鴨遣方法儀 (森正幸著)
			130	蘇明山莊発句藻 (柳沢信鴻著 珠成編)
			131	米つくは (柳沢信鴻著)
			132	蘇明漫筆 (柳沢保光著)
			133	蘇明漫筆 (柳沢保光著)
				名所百首和歌 (柳沢吉保著)
				如葉集 (正親町町子著)
				六義園八景和歌 (柳沢吉保著)
				六義園十二境和歌 (柳沢吉保著)
				柳沢吉保詠百首 (柳沢吉保著)
				六義園記 (柳沢吉保著)
				六義園八十八境 (柳沢吉保著)
				六義園十二境和歌 (邦永親王ほか著)

137 136 135 134  
六義園八景和歌（邦永親王ほか著）  
織田家明和記抄  
諸侯品評記  
神農問答  
二本松藩生子并養老手当法

和歌  
記錄  
雜記  
放鷹  
記錄

国文学研究資料館特別展示目録 七

新収資料展

昭和五七年九月二日 発行

編集 国文学研究資料館

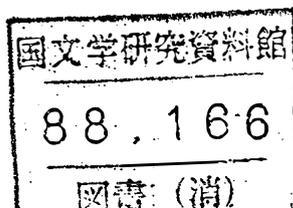
整理 閲覧部 参考室

発行 国文学研究資料館

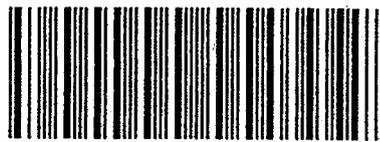
〒142 東京都品川区豊町一―一六―一〇

TEL 〇三―七八五―七三三

ISBN4-87592-004-0



国文学研究資料館



0088800166

ISBN4-87592-004-0